明日の学校をともに考えるベネッセの教育情報誌

全国の校長先生に無料で年3回お届けしています

VIEW21

ビュー21
2014
Vol.2
小学版

特集

「学びたい！」意欲を伸ばす言語活動

総論　横浜国立大教育人間科学部教授、学部長特任補佐（教職大学院担当）**髙木展郎**

学校事例　秋田県横手市立朝倉小学校／愛知県高浜市立翼小学校／千葉県千葉市立海浜打瀬小学校

調査分析　言語活動を通して、思考過程重視の学習観を育む

私を育てた あの時代、あの出会い　埼玉県さいたま市立大宮小学校校長 **今村信哉**

Benesse発 これからの教育　埼玉県久喜市立江面第二小学校　全員が意見を出し合えるジグソー法で考えを深める

つながる 学校と家庭の学び　兵庫県姫路市立四郷小学校・四郷中学校　小中一貫の「学びの架け橋」で家庭学習の意欲と習慣を育む

ベネッセ教育総合研究所　http://berd.benesse.jp

C O N T E N T S

VIEW21

［びゅーにじゅういち］

2014

Vol.2

小学版

特集

3 「学びたい！」意欲を伸ばす言語活動

4 総論
言語活動で「分かった」という実感を持たせ、学ぶ意欲を伸ばす
横浜国立大教育人間科学部教授、学部長特任補佐（教職大学院担当）髙木展郎（のぶお）

8 学校事例1
子ども主体の話し合い活動で「自分たちが授業をつくる」意識に
秋田県横手市立朝倉小学校

12 学校事例2
自分たちで話し合い、決め、実行する「意思決定学習」で自律と自立を育む
愛知県高浜市立翼小学校

16 学校事例3
考えの過程をふきだしに書き、思考を深め、広げる力を育む
千葉県千葉市立海浜打瀬（うたせ）小学校

20 調査分析
言語活動を通して、思考過程重視の学習観を育む
ベネッセ教育総合研究所「小中学生の学びに関する実態調査」の結果から

Teachers' cafe発 特別企画

22 ワークショップ型の校内研修で同僚性を育み、学校力を高める

連載

1 私を育てたあの時代、あの出会い
目の前の子どもに今何が必要か、見極め実践する大切さを学んだ
埼玉県さいたま市立大宮小学校校長◎今村信哉

26 Benesse発　これからの教育
全員が意見を出し合えるジグソー法で考えを深める
埼玉県久喜市立江面（えづら）第二小学校

28 つながる学校と家庭の学び
小中一貫の「学びの架け橋」で家庭学習の意欲と習慣を育む
兵庫県姫路市立四郷（しごう）小学校・四郷中学校

32 読者のページ Reader's VIEW／編集後記

*本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。
また、敬称略とさせていただきます

*本誌記載の記事、写真の無断複写、複製及び転載を禁じます

http://berd.benesse.jp 本誌記事は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでもご覧いただけます

私を育てた
あの時代、あの出会い
第17回

目の前の子どもに今何が必要か見極め実践する大切さを学んだ

埼玉県 さいたま市立大宮小学校校長 今村信哉 IMAMURA SHINYA

教師は日々、さまざまな働き掛けの中で子どもを育てる。そして教師は、共に働く仲間との出会いの中で育っていく。出会いから学んだ教育の原点、そして次代を担う若い世代に伝えたい不易を、今村校長が語る。

いまむら・しんや　専門は特別活動。小学校学習指導要領解説特別活動編作成協力者、「心のノート」改訂作業部会協力委員等を歴任。現在、さいたま市立幼児教育センター付属幼稚園園長、さいたま市小学校校長会会長も務める。

- 1980（昭和55）新採として浦和市立（現さいたま市立）辻小学校に赴任。
- 1987（昭和62）ケニアのナイロビ日本人学校に赴任。1990年に帰国後、前任校へ
- 1991（平成3）浦和市立（現さいたま市立）中尾小学校に赴任
- 1996（平成8）浦和市（現さいたま市）教育委員会指導主事に着任
- 1998（平成10）浦和市立（現さいたま市立）高砂小学校に教頭として赴任
- 2001（平成13）草加市立高砂小学校に赴任
- 2003（平成15）さいたま市立北浦和小学校に赴任
- 2006（平成18）さいたま市立蓮沼小学校に校長として赴任。特別活動「希望の会」の立ち上げに参画
- 2010（平成22）さいたま市教育委員会教職員課副参事に着任。翌年課長に
- 2012（平成24）さいたま市立大宮小学校に赴任

教科や役割という枠組みで指導の線引きをしない

定年を控えて振り返ってみると、心の中にはいつも宮沢武敏（たけとし）先生の姿が理想の教師像としてありました。中学校で理科を教わり、所属していた水泳部の元顧問です。

宮沢先生が他の先生と違っていたのは、指導に線引きをしないことでした。例えば、ある日の理科の授業で先生は「これは今、必要だ」と言って集合の考え方を教え始めました。「それは数学ではないか」と私たちが尋ねると、「花畑を例にしたから理科だ」と笑いながら答えられました。また、家族とうまくいかず課題の多かった生徒を、先生は自宅に引き取り、しばらく一緒に暮らしていました。食事や洗濯など、身の回りの面倒も見ていたようです。教科や教師の役割という枠にとらわれず、目の前の子どもに今、必要なことは何かを見極めて実践する姿は、私の教師としての手本となりました。

宮沢先生の姿を最も意識したのは、いわゆる学級崩壊をした6年生の学級を受け持った時です。私は2学期から担任となり、まず子どもたちが何をしたいのか、その声に耳を

「教育に流行はない。不易の中で今、必要とされているのが流行」

傾けました。しかし、子どもたちは、私の方を全く見ようとしません。そこで、毎日1時間、授業時間に机を教室の後ろに寄せて車座になり、どんな学級にしたいかを話し合わせました。子どもが何を考えているのかを引き出し、自分に何が出来るのかを探ろうとしたのです。

子どもたちは、始めは「協力する」「仲良くする」と表面的な言葉ばかり言いました。「本当にそう思っているのか」と何度も問い返すと、次第に思いを口にしていきました。最終的に学級の目指す姿を決めることになり、「チャーハン」と「ミックスジュース」が候補となりました。それぞれへの支持が拮抗する中、ある子が「チャーハンは元の材料がよく分かる。でも、ミックスジュースは元が何か分からないから嫌だな」と発言。途端に、満場一致で「チャーハン」に決まったのです。

話し合いを重ねるうちに、学級が更に一体感を持つようになりました。「チャーハン」という目標から、「集まろう、一粒一粒おいしいクラス」とキャッチフレーズが決まり、授業にも落ち着いて取り組むようになりました。子どもたちはやりたいことが分からない苛立ちを発散させていたのだと思います。子どもに寄り添い、何をしたいのかを引き出し、その実現を支えることが教師の役割なのだと、改めて感じました。

相手が誰であれ丸ごと受け入れる

「教育の基本はカウンセリングマインド」という考えを持ったのも、宮沢先生の大きな影響があります。私が指導主事になった頃、同窓会で先生にお会いしたのですが、「担任も管理職も、カウンセリングを学ぶべきだ」と言われました。ちょうど教育界にカウンセリングの必要性が言われた始めた頃で、私は流行の1つとしか思っていませんでした。しかし、先生の言うことは重要なのだろうと、カウンセリングについて自分なりに勉強したのです。次第に、カウンセリングは流行ではなく、教育において不易だと思うようになりました。

私の理解では、カウンセリングは相手を丸ごと受け入れ、何をしたいのかを引き出すことです。それは、私が子どもに接する時に最も大切にしてきたことでした。授業をまじめに受けず反抗されると、平常心ではいられず、子どもから距離を置きたくなることもあります。でも、担任が諦めてしまったら、誰がその子を認めるのでしょう。

カウンセリングマインドが重要であることは、管理職でも同じだと思います。校長として先生方や保護者から相談を受ける時にも、また、市の小学校長会長として後輩の校長から相談を受ける時にも、私は担任時代と同じ姿勢で接しています。頭ごなしに自分の考えを伝えて、意欲を潰してはいけません。子どもに接する先生方が思いを実現しやすい環境をつくるのが、校長なのです。

教育には不易と流行があると言われます。でも私は、大切なのは不易であり、流行は不易の中で今クローズアップされていることだと思うのです。そのことに気付いたのも、宮沢先生の示唆があったから。私はこれからも先生が示してくれた教師のあり方を求め、追い続けていきます。

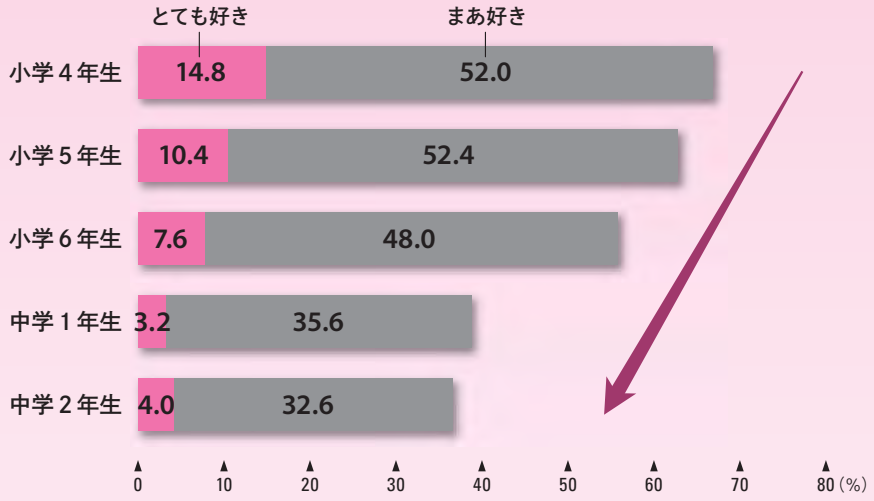
特集

「学びたい！」意欲を伸ばす言語活動

言語活動を行ってはいるが、活動自体が目的になりがちで、
本来の意図の共通理解が難しいという。
今回の特集では、「思考力・判断力・表現力」の育成はもちろん、
学年が上がるにつれて減少する傾向が見られる「学習意欲」を伸ばす点にも着目し、
言語活動や学び方の工夫を提案したい。

学年が上がるにつれ、勉強を好きな子どもが減少

Q. あなたは勉強がどれくらい好きですか。



出典／ベネッセ教育総合研究所「小中学生の学びに関する実態調査」（2014）
調査時期は、2014 年２～３月。調査対象は、全国の小学４年生～中学２年生の子どもとその保護者各 5,409 人（小学４年生 1,217 人、５年生 1,184 人、６年生 1,049 人、中学１年生 933 人、２年生 1,026 人）。調査方法は、郵送法による自記式質問紙調査）

言語活動で「分かった」という実感を持たせ、学ぶ意欲を伸ばす

横浜国立大教育人間科学部教授、学部長特任補佐（教職大学院担当）　髙木展郎（のぶお）

言語活動に熱心に取り組んではいるものの、活動自体が目的になってしまうなど、さまざまな課題を感じている小学校が多いようだ。言語活動を通じて主体的に学ぶ意欲を育むためには、どのような考え方に基づいて活動を組み立てればよいのか。今求められている言語活動のあり方について、横浜国立大の髙木展郎教授に話を聞いた。

言語活動が重視される背景

新たな学力観に基づいた言語活動が求められている

言語活動が重視される背景には、これからの時代に通用する新しい学力の育成が求められていることがあります。そのことを広く知らしめたのが、いわゆるＰＩＳＡショックでした。２００３年に行われたＰＩＳＡ調査では、読解力の日本の順位が00年の８位から14位に、更に06年では15位にまで下がったことが問題視されました。記号式の問題の正答率が高い一方で、記述式は無回答が多いという実態は、日本の教育課題を明確に表していました。

先進諸国に求められる学力の１つとして、ＯＥＣＤが示した読解力は、「受信」「思考」「発信」の過程から成る、いわば考える力と捉えられます。そうした学力を付けるために、07年に学校教育法が一部改正され、「思考力、判断力、表現力」という言葉が盛り込まれました。これに加えて、「基礎的・基本的な知識・

図　現場の先生の声―言語活動の課題

■ **教員の共通理解が不十分**
- どうしても基礎・基本の定着を図るための授業が中心となってしまっている。
- 「言語活動」の実施が先行し、充実が求められている背景について、まだ十分に理解されていないのが現状。

■ **活動が目的化している**
- 子どもが毎日順番にスピーチをする実践が見られるが、次第に形骸化する傾向がある。
- 言語活動への意識は高まってきたが、発達段階に応じた活動が系統的にされておらず、やや単発的な印象がある。

■ **評価が難しい**
- 活動の中で、どのような学びの姿があったときに、思考力・判断力・表現力が育成されるのか、検証する必要性を感じている。
- 活動が目的となり、育てたい力が定着しているか、評価部分が弱い。

＊『VIEW21』小学版読者モニターアンケート（2014 年2～3 月実施）より一部を掲載

「学びたい！」意欲を伸ばす言語活動

技能」、および「主体的に学習に取り組む態度」が、「学力」を構成する重要な3つの要素として、初めて定義されたのです。

先生自身が受けてきた教育における学力観や指導観から脱却するのは、容易なことではありません。しかし、学力の定義は、時代に合わせて変化するという認識を持つ必要があるとも考えます。

例えば、以前は暗記中心の学力が主流でしたが、今では、分からないことがあってもインターネットで即座に調べることが出来るので、「情報を活用する」といった力がより重要になっています。こうした流れの中で、根拠に基づき自分の意見を述べることが出来る力が求められており、思考力、判断力、表現力などが重視されるようになりました。インプット偏重から、「話す・書く」といったアウトプットを大切にした学習活動、すなわち言語活動の充実が求められているのです。

これは、世界共通というわけではないことも大切な視点です。例えば、識字率の低い国では、読み書きなどの学力が優先されるでしょう。先進国の日本だから、そうした学力が必要と考えられているのです。

たかぎ・のぶお◎横浜国立大教育学部卒。兵庫教育大大学院学校教育研究科言語系修了。東京都公立中学校教諭、神奈川県立高校教諭、筑波大学附属駒場中学・高校教諭、福井大、静岡大を経て現職。著書に『ことばの学びと評価』（三省堂）など。専門分野は教育方法学、国語科教育学。

言語活動での注意点

「活動ありき」の発想を捨て付けたい学力に沿った言語活動を

言語活動とは、あくまで各教科の学力を育てるための学習活動であり、それ自体が目的ではありません。言語活動は、「教科等の目標を実現する手立て」なのです。

ところが、学校によっては、言語活動を行うことが目的となってしまい、活動を通して育てたい学力が十分に考慮されておらず、「話し合いが盛り上がれば良い」と思われることもあるようです（図）。言語活動は型から入るのではなく、子どもたちに付けたい力を見極めて、そのために必要な活動内容を検討するのが適切な流れです。

言語活動が学力育成の手段であることは、評価の観点にも大きくかかわってきます。評価の対象となるのは、言語活動そのものではなく、あくまでも活動を通して付いた力です。どれだけ生き生きと活動をしていても、付けたい力がきちんと身に付いていなければ意味がありません。そこで、観点別評価を設定して評価する必要があります。

やや極端な言い方ですが、付けたい力が十分に身に付いたと判断したら、言語活動を途中で打ち切ってしまっても問題はないのです。日本の小学校の先生の丁寧な指導は誇るべきところですが、言語活動において、全ての子どもの動きに対応しようとすると、必要以上に時間を掛けてしまうことがあります。その点に気を付けた方が、授業がより充実するでしょう。

言語活動の取り入れ方

「説明」や「論述」など普段の活動を意識的に行う

言語活動の効果的な方法を見ていきます。

基本的に、指導案で「付けたい力」を明確にし、それを達成するために有効であるならば、言語活動を取り入れます。例えば、知識・技能の習得においては、従来型の指導の方が効果的な場合もあるでしょう。全ての単元に言語活動を行うべきと考える先生がいますが、それは誤解です。思考力、判断力、表現力を育てるために言語活動を取り入れると考えてください。

言語活動の形態には、「記録」「要約」「説明」「論述」「討論」が示されています。例えば、文章を要約したり、自分の考えを論述したりすることも、立派な言語活動です。最適と思われる形態の言語活動を取り入れれば良いのです。

このように考えると、言語活動がとても取り入れやすく感じられるのではないでしょうか。そうなのです、言語活動は、普段から先生方が実践している指導と何ら変わりがありません。それを意識化することが、求められているだけなのです。これまでは無意識に行っていた言語活動を、意識して授業を組み立てることによって、付けたい学力を見据えたより効果的な学習が出来る。それが「言語活動の充実」で求められていることです。ですから、たっぷりと準備に時間を掛けて、大掛かりな活動をする必要は全くありません。

おそらく最も取り入れやすいのは、「説明」です。ペアになって説明し合う学習活動は、短時間で簡単に行えます。しかも、簡単な言語活動ではありますが、まず自分が理解していなければ、相手が理解できるように説明できません。おのずと、子どもがしっかりと考えられるのです。「論述」も比較的容易な活動です。調べたことをまとめて書くだけでも十分です。

実は、研究授業などで実践されている言語活動をそっくりそのまま実践することはお勧めできません。モデル授業が非常に参考になるのは確かですが、授業はあくまでも前時までの学習の積み重ねの上に成り立っています。言語活動は、目の前の子どもの実態や、それまでの授業の流れを踏まえて計画することで高い効果が期待できるのです。

効果的な言語活動のポイント

「聴いて、考えて、伝え合う」授業づくりを

言語活動は、子どもが「分かった」といった学習の喜びを実感しやすい学習活動でもあります。そうした実感は学びへの意欲を高め、「もっと学びたい」といった思いを生み出す効果が期待できます。

例えば、次のような活動では「分かった」という実感を持ちやすくなります。

まず、学習で分かったことを隣の子どもと伝え合います。そして、自分の考えではなく、ペアの子どもがどう考えているかを説明してもらいます。これが少し高度になると、「○○さんはこう言ったけど、私はこう思う」などと、自分の考えと比較しながら発表できるようになります。全員の説明を聞くのは大変ですから、ノートに書かせて、授業後に評価をしてもよいでしょう。

言語活動で話し合いなどを行う場合は、「聴いて、考えて、伝え合う」という流れを大切にしてください。自分の考えを持つ時間を十分に保障しなければ、話し合いをしても深まらないからです。

子ども同士が伝え合う環境があることは、学校教育の最大の利点といえます。そうしたかかわり合いがなければ、授業は答え合わせをするだけの場になってしまいます。もちろん、知識の伝達も重要ですが、それだけをしていれば良い時代はもう終わったのではないでしょうか。言語活動を機能させることで、子ども同士がいかにかかわり合いながら、考えを深めていくかを工夫することが、これからの授業づくりの重要なポイントです。

子ども同士が伝え合う授業をすることで、一人ひとりに居場所が生まれて、人間関係づ

「学びたい！」意欲を伸ばす言語活動

くりや学級づくりにつながっていきます。そのために心掛けていただきたいのが、「あたたかな聴き方、やさしい話し方」です。これが定着すれば、学校は大きく変わります（高木教授が指導に入られている学校事例はP.8～11で紹介）。

特に、1年生のうちから「聴く」ことを徹底的に大切にさせましょう。小学校入学を控えた子どもに「学校で何をするの？」と聞くと、「お勉強！」と口をそろえて答えます。その段階から、「勉強は、人の話を聴くことだ」と何度も教えましょう。1回教えるだけでは身に付きませんから、友だちの話を聴けていない時はいったん止めて、もう一度話してもらいます。それを何度も繰り返してください。

分からないことを分からないと、素直に表現できる学級をつくることも大切です。やはり1年生の段階から、「分からない」「困っている」と言った子どもを褒めるようにしてください。そうすることで、分かった子どもが、分からない子どもに温かく教えられるような関係性を築いていただきたいと思います。

先生方は子どもと一対一の関係は得意ですが、これまでは子ども同士が聴き合う関係をつくる指導には、あまり力を入れてこなかったかもしれません。子どもが発表する時、先生は教室の対角線に行くようにといわれますが、それでは子どもが先生の顔だけを見て話すことになってしまいます。私は、先生が発表者の後ろに立ったり、あるいは時々子どもの目線から消えるようにしゃがんだりすると良いと思います。発表者の後ろに立つことで、他の子どもがどのような様子で聴いているのかを確認できますし、子どもが先生の期待に応えようと顔色をうかがうことなく、自分の思いだけで発表できるからです。

教師が大切にしたい姿勢
教師に求められるのは「聴く」「待つ」姿勢

小学校の先生は、全ての教科を指導しますから、時間的な制約もあり、教師用指導書等を参考にして授業を組み立てることもあるかと思います。しかし、指導書はよく練られているものの、目の前の子どもの関心や課題には合っていないこともあります。例えば、指導書では10時間の単元構成でも、子どもの理解に応じて、時数を増減する方が良い場合もあるでしょう。指導書はあくまで参考にとどめ、子どもの実態に合わせたカリキュラムを練っていただきたいと思います。

また、先生方は説明することには大変長けていますが、これからは「聴く」と「待つ」を心掛けていただきたいと思います。先生がたくさん話しすぎると、子どもが話す時間がなくなってしまいます。子どもが話すのをしっかりと「聴き」、子どもが考えるのを「待って」、本題からずれたら修正する。そこに先生の出番があります。そのためには、子どもにとって先生は一番の聴き手でなくてはなりません。先生が「教える人」から「働き掛ける人」になる意識も必要でしょう。

校長先生には、先生方が言語活動に関する共通理解を深めていくような役割を期待しています。その際は、言語活動が学力を付けるための活動であること、また活動そのものではなく、それを通して付いた力が評価の対象であることなどを留意してください。そして、先生の個性を大切にしつつ、皆が同じ方向を向いてチームで子どもを育てるような学校づくりを進めていただきたいと思います。

主体性を育む言語活動のポイント

◎「分かった」という学習の喜びを実感しやすいのが言語活動。付けたい力を考慮した上で、活動内容を検討する。

◎力が付いたと判断したら、必要以上に言語活動に時間を掛けなくても良い。普段行っている「説明」や「論述」を意識的に組み入れるだけでも十分なことも。

◎子どもたちが「聴いて、考えて、伝え合う」授業が、学級づくりにもつながり、子どもの学習意欲も高まる。

◎子どもに「教える」という意識を改め、子どもが話すのを「聴く」「待つ」ことを心掛けていく。

学校事例 1

子ども主体の話し合い活動で「自分たちが授業をつくる」意識に

秋田県　横手市立朝倉小学校

2009年度から言語活動の充実に向けた研究に取り組む横手市立朝倉小学校。学力を更に伸ばしていくために、14年度から、子ども主導の話し合い活動に重点を置いている。学校が一丸となって研究に取り組むにつれて、子どもたちに「授業は自分たちでつくるもの」という主体的な意識が芽生えつつある。

取り組みのねらい

- 自分たちで課題を見付け、それを解決していく授業をつくる
- 子どもが学習を自分のこととして理解できるようにする
- 相手の考えをしっかり聞き、自分の考えを理解してもらう力を付ける

取り組みの内容

- 話し合い活動を軸とした授業スタイルを教師間で共有する
- 教師と子どもが理想の授業像とその意図を共有し、実現を目指す
- 研究授業の活性化や教師の自己評価の導入などで、研究を推進

取り組みの成果

- 子どもたちが「自分たちが授業をつくっている」という意識を持つようになった
- 子ども主導の話し合いにより、課題の解決に向かえるようになった
- 教師の指導観が変化し、教師の出番を見極められるようになった

School Data

◎1997（平成9）年、横手北小学校、朝倉小学校の統合により設立。教育目標に「やさしく　かしこく　たくましく」を掲げ、言語活動の研究に力を入れている。2013年度からNIE研究指定校。

校長	永沢敏昭先生
児童数	436人
学級数	15学級（うち特別支援学級２）
所在地	〒013-0008　秋田県横手市睦成字碇185
TEL	0182-32-6070
URL	なし
公開研究会	2014年10月30日（木）予定

取り組みのねらい　これからの社会に必要な言葉の力を育むために

横手市立朝倉小学校の学区は、米や果物を栽培する農村地帯と市街地から成る。三世代同居の家庭が多く、地域に見守られて育つ子どもは、全体的に穏やかで優しい。教育熱心な保護者は多いが、塾に通う子どもは少なく、勉強は学校を中心に考えているという。永沢敏昭校長は次のように話す。

「地域や保護者が学校を信頼してくれるおかげで、先生方は自信を持って指導をしています。子どもの多くは、入学時に規範意識の

「学びたい！」意欲を伸ばす言語活動

土台が出来ていて、積極的に学習に取り組むこともあり、学力は概して高めです。半面、周囲が自分の考えを察してくれる以心伝心の環境で育つからか、自分を表現する力に課題を感じています。せっかく力があるのに、それが見えにくいように思うのです」

同校の教師のチームワークは良く、切磋琢磨する関係にあることも強みだという。

「どの先生も努力家で、一丸となって校内研究に取り組んでいます。平均年齢が48歳とベテランが多いことも安定した指導の要因でしょう。一方で、若手教師への指導技術の継承という課題も抱えています」（永沢校長）

横手市では、2009年度から市内の全小・中学校で言語活動の研究に取り組んでいる。小中連携を強く意識して中学校区単位で研究を進めており、各校区の研究成果を市全体で共有している。

これまでの研究を通し、教師間では、言語活動の目的やそれを実現する授業のあり方についての共通理解が得られた。子どもには、話す・書くことへの抵抗感が減り、学習意欲が向上するなどの成果が見られたが、研究に行き詰まった時期があったという。

「授業は改善されましたが、高学年に伸び悩みが見られました。子ども主体の授業を追求していましたが、『本当に主体的になっているか』『学ぶ内容を自分のこととして理解しているか』と自問すると、まだ不十分という考えに至りました」（永沢校長）

こうした課題を踏まえ、14年度は「聴いて、考えて、つなげて話すことを通して考えを深めていく子ども」を研究主題にした。研究主任の佐藤利美先生はこう説明する。

「子どもが自分たちで課題を見付けて、考え、解決していく体験が、これからの社会を生きる力を育むために必要だと考えました。そのためには、相手の考えをしっかり聴き、自分の考えを相手に理解してもらわなければなりません。言語活動の充実により、そうした言葉の力を育もうとしています」

取り組みの内容

教師は出番を見極め 子ども主導で話し合いを進める

研究では、教師間で授業スタイルの共有化を図っている。授業の導入時には本時のねらいや付けたい力を明確にし、子どもが興味・関心を持てる課題を設定する。続いて、課題解決のための方法を子どもたちが考え、話し合い活動を行う。授業の最後は、冒頭で示したゴールに沿って、自分の言葉でまとめるという流れだ。

14年度は、話し合いを充実させるために、友だちの意見を比較しながら聴く指導に重点を置いている。きちんと聴いて、理解を深め、思考を巡らせ、それを表現するというプロセスを通じて、子どもの主体性を引き出すと共に、考える力を育てようとしている。6学年主任の高橋智恵子先生は、次のように説明する。

「理解して思考して表現するという流れを念頭に置いて授業をつくると、子どもは主体的に授業に取り組まざるを得ません。理解し

横手市立朝倉小学校校長
永沢敏昭 ながさわ・としあき
「自分自身の幸せと社会の平和のために、相手が望む言葉を掛けられる感性を身に付けてほしい」

横手市立朝倉小学校
佐藤利美 さとう・としみ
研究主任。3学年担任。「子どもの真剣な表情を引き出すために、一緒に喜んだり怒ったり泣いたりしたい」

横手市立朝倉小学校
佐藤詩輝 さとう・しこう
4学年担任。「子どもが実感を伴って理解するために、自分のこととして捉えられる授業をする」

横手市立朝倉小学校
佐藤輝子 さとう・てるこ
5学年主任。「常に子どもたちに本気で向き合いたい。褒める時はとことん褒め、叱る時はきっちり叱る」

横手市立朝倉小学校
高橋智恵子 たかはし・ちえこ
6学年主任。「子どもの様子は、自分の授業を映し出すもの。常に子どもから学び続ける教師でありたい」

なければ思考は出来ず、思考しなければ表現は出来ないからです。自ら取り組むようになれば、おのずと思考力や表現力も高まります」

子ども主体で進めるために、教師が発言する場面を出来るだけ少なくするよう、その見極めも大切にしている。

「教師の出番が少なくても話し合いが成り立つためには、子どもが明確なゴールをイメージ出来る課題を設定し、重点的に話し合うポイントを絞り込むなど、教材研究を深く行うことが欠かせません。これが不十分だと、話し合いが焦点化されず、だらだらと時間が過ぎてしまいます」（佐藤利美先生）

もちろん、教師の想定通りに話し合いが展開しない場面もある。5学年主任の佐藤輝子先生が話す。

「子どもが気付くまで我慢するのが、教師の基本スタンスです。話し合いの方向がずれることもありますが、子ども自身が軌道修正するのを待ちます。ゴールへの糸口は、いろいろな考えが出される中から見付かることが多いので、子どもには間違いを恐れず、自分の考えを言葉で表すことが大事だと繰り返し伝えています」

大きな集団では発言が出にくい場合は、ペアやグループで話し合ったり、自分の考えを書いたり、自信を高める時間を持たせたりして、話し合い活動が活発になるよう工夫している。

皆の言葉がつながっていくのが良い授業

教師と子どもが、理想の授業像を共有することにも努めている。その一環として、望ましい学習姿勢を示した「『聴き方・話し方』ステップシート」を全ての子どもに配布した（**図1**）。これは、学年ごとに到達したい聴き方と話し方をまとめたものだ。例えば、聴き方は、1年生は「話す人の方を見て聴く」「人の話をさいごまで聴く」といった基本から始まり、3年生以上は「自分の考えと比べながら聴く」、5年生以上は「課題に沿った話し合いができているのか考えながら聴く」とステップアップする。シートの裏面には、より具体的な「あたたかい聴き方・やさしい話し方」を例示している（**図2**）。学級によっては、机に貼ったり下敷きにしたりして活用している。

「理想的な学習態度を伝えることで、子どもが『皆の言葉をつないでいくのが良い授業なんだ』という意識になってきました。マニュアルと捉えられないように、『こんな聴き方や話し方をすると、皆が話しやすくなり、良い学習になるよ』と、意図をしっかり伝えています」（高橋先生）

図1　「『聴き方・話し方』ステップシート」（聴き方を抜粋）

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	ステップ
課題に沿った話し合いができているのか考えながら聴く					★	★	STEP 8
話し手の意図や目的を考えながら聴く				★	★	★	STEP 7
話し手の言いたいことを分かろうとして聴く			★	★	★	★	STEP 6
自分の考えと比べながら聴く			★	★	★	★	STEP 5
友だちの考えをふくしょうできるように聴く		★	★	★	★	★	STEP 4
うなずいたりつぶやいたりしながら聴く	★	★	★	★	★	★	STEP 3
人の話をさいごまで聴く	★	★	★	★	★	★	STEP 2
話す人の方を見て聴く	★	★	★	★	★	★	STEP 1

子どもに理想の学習姿勢をイメージさせて、自分がどの段階にいるかを振り返るように促している

＊同校の資料から抜粋して編集部で作成。ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトで全文をご覧いただけます。http://berd.benesse.jp > 教育情報>小学校向け

図2　「あたたかい聴き方・やさしい話し方」（3年生、5年生を抜粋）

友だちの考えを聴きわけ、違いを考える	5年	～さんと～さんの考えをくらべると…　～さんの意見を聴いて考えが変わったのですが… ～さんと～さんの考え、どっちがいいのでしょうか みんなの意見を比べてみて考えたのですが… 私はどちらかというと～さんの考えに賛成で、なぜかというと…
友だちの考えを言いかえる		～さんの言っていることは、…ってことですよね。私も…、私は… ○○さんの意見はつまり…でしょう
たとえて話す	3年	たとえば…　それって～にたとえると…　もし…だったら
分からないことをたずねる		～さんが言っていることが分からないので、もう一度言ってください　だれか教えて ～さんにたずねます　質問します
図を使って説明する		前に出ます　書いて説明します　この絵を見てください　黒板を見てください

具体的な聴き方や話し方を例示している。授業ではこのシートを参照して発言し、話し合いを深めていく姿が見られる

＊同校の資料から抜粋して編集部で作成。ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトで全文をご覧いただけます。http://berd.benesse.jp > 教育情報>小学校向け

「学びたい！」意欲を伸ばす言語活動

全教師が実践を自己評価し次の目標を生み出し続ける

学校が一丸となって取り組む研究体制にも注目したい。まず、年度初めに研究主任がモデル授業をして具体的なイメージを共有している。研究授業は毎月行い、事後検討会では、論点が散漫にならないよう、「思考を深めるための手立ては有効か」「教師の出番は適切か」と2つの観点に絞って議論している。

「常に自分の授業に置き換え、良い点だけではなく、『こうしたらもっと良くなりそう』といった意見を出し合っています。子どもに『聴いて、考えて、つなぐ』という視点を求めるためには、まず教師自身がそれを実践しなくてはならないという思いがあります」（佐藤輝子先生）

研究成果を授業に効果的に反映させるために、毎月、重点チェック項目を示し、教師が自己評価をするのも特徴的な試みだ。自己評価の集計結果を共有し、そこから次の目標が生み出される（図3）。

取り組みの成果

教師の導きに頼らずに子どもが自分たちでゴールを目指すように

このような話し合い活動を続けたところ、子どもの中に「自分たちが授業をつくっている」という意識が生まれてきているという。

「子どもたちは、今まで教師が自分たちの良い考えをつないでまとめてくれるのを待っていましたが、話し合いを任せていくと、次第に自分たちでゴールを目指すようになりました。意識の変化は大きな一歩です。まだ話し合いがうまくいかない場面もありますが、『自分たちでやることが大事』と伝えています」（佐藤利美先生）

子どもの変化を目の当たりにして、教師の指導観も大きく変わっている。4学年担任の佐藤詩輝（しこう）先生はこう語る。

「学級づくりが授業の土台という考え方もありますが、良い授業が学級づくりの土台になると気付きました。そして、学校生活の中心である授業を通して、学力や学習する力を付けたいと改めて思いました。また、先生方の授業を気軽に見に行くようになり、目指す授業が明確になったことで、自分自身の授業が良くなってきたという実感があります」

明確な方向性を共有し、今後も研究を推進していく考えだ。

「本来、子どもは主体的であるのに、教師の意図に沿った課題に取り組むことを求め過ぎて、主体性を奪っていたのかもしれないと反省しました。研究を通し、子どもの力でゴールに向かう場を準備することが、教師の仕事という思いが強くなっています。そうした授業を積み重ねる中で、子どもはどんどんたくましくなり、やがて自分の考えを発信して社会に貢献できる大人に育つのだと信じています」（永沢校長）

図3　「朝倉小学校研修だより」

朝倉小学校研修だより No.8

一日一歩

平成26年6月9日

5月の学習指導をチェック！

実践項目 | 自己評価の視点 | A | B | C

「ステップシートの活用」「反応しながらあたたかく聴く」ことはさらに意識して仕込んでいく必要あり！！
子どもたちにも重点を伝えて、常に意識させていきましょう。

A評価が増えました。この調子です。

研究主任が毎月発行する「朝倉小学校研修だより」では、教師の自己評価の結果を集計し、伸びた点を示して認め合いを促すと共に、改善が望まれる点を指摘している
＊同校の資料からイラストを削除して掲載

自分たちで話し合い、決め、実行する「意思決定学習」で自律と自立を育む

愛知県 高浜市立翼小学校

子どもが自分で考え、行動する力に課題を感じていた高浜市立翼小学校。2011年度から、子どもたちが問題を解決に導くために意見を出し合って実行する「意思決定学習」を教育活動に取り入れている。決めた内容に責任を持って取り組む体験を積み重ねることで、子どもの行動に変化が表れつつある。

取り組みのねらい

- 自分自身が設定した目標に向かって、自分で行動できる子どもを育てる
- 相手の気持ちを考えて動く力を身に付ける
- 他者とのかかわりの中で意見を伝え合える力を付ける

取り組みの内容

- 子どもたちが問題を解決に導くための意見を出し合い、決定し、実行する「意思決定学習」を全学年で実践
- 学習内容を自分にかかわることとして捉えられる授業づくりを行う
- 「意思決定学習」を教科学習以外の活動にも取り入れる

取り組みの成果

- 自分で考えて動き、必要なことを決められるようになってきた
- 「友だちの意見を聞きたい」「自分の意見を言いたい」という気持ちが育った
- 「やれば出来る」という自信が子どもに芽生えた

取り組みのねらい

自分で目標を設定しそれに向かって行動できるように

高浜市立翼小学校は、人口が増加傾向にある高浜市に2002年に開校した。多くの保護者が自動車関連企業に勤務しており、共働きの家庭も多い。外国籍の保護者との意思疎通のため、校内には通訳が常駐している。

PTAは新しい学校を一緒につくり上げようという気持ちが強く、PTA主催のイベントが多いのも特徴だ。研究主任で6学年主任の増田洋喜（ひろき）先生は、地区で育つ子どもの様子を次のように語る。

School Data

◎2002（平成14）年開校。教師主導から子ども主体の教育への転換を目指して教育改革に取り組む。2012年、全日本小学校ホームページ大賞にて「全国ベストセレクション200」を受賞。

校長　六角英彰先生
児童数　713人　学級数　23学級（うち特別支援学級2）
所在地　〒444-1305　愛知県高浜市神明町5-1-1
TEL　0566-54-2831
URL　http://www.city.takahama.aichi.jp/tsubashoweb/
公開研究会　未定

「学びたい！」意欲を伸ばす言語活動

「素直な子どもが多く、目標を与えられると達成に向けて一生懸命に頑張りますが、言われた通りにしか動かないことが課題だと感じています。また、『人の気持ちを分かりたい』『人の役に立ちたい』という気持ちは強いのですが、実際に相手の気持ちを考えて動くことはなかなか難しいようです」

そうした現状を踏まえ、11年度から、「未来に羽ばたく翼を自分で育てる子どもの育成」という研究主題を設定した。

「自分自身が設定した目標に向かって自分で行動できる、『自律』と『自立』を子どもの中に育てたいと考えています。こうした自分の人生を切り開いていく力や姿勢を、校名である『翼』という言葉に象徴させて研究に取り組んでいます」（増田先生）

取り組みの内容

飯ごう炊飯の手順を自分たちで調べ、考え、決める

研究の柱は、「意思決定学習」だ。これは、子どもたちが問題を把握し、それを解決するために意見を出し合い、最善策を選択・決定し、実行し、事後に振り返るというプロセスの学習だ。六角（ろっかく）英彰校長が担任をしていた頃に実践していた学習活動だが、同校の子どもたちが抱える課題解決の手立てとなると考え、導入を決めた。

「私は自身の経験から、意思決定学習を通し、子どもたちが変わっていったという実感を持っています。この学習を行った学級では、次第に自分で計画を立てて行動できるようになり、2年目には、私が出張で不在の時間に、子どもだけで授業が成立するまでに成長しました。本校の子どもにも、そのように自分で考えて行動する力を付けてほしいと考えています」（六角校長）

意思決定学習は、5つの過程で構成される（図）。全教科で実践できるが、これまでは比較的取り入れやすい「総合的な学習の時間」（以下「総合学習」）や生活科、社会科、家庭科を中心に実践している。5年生の「総合学習」で行う「飯ごうマスターになろう！」を通し、意思決定学習の流れを見ていこう。

この授業では、野外活動の飯ごう炊飯で、いかに効率良く、おいしいカレーを作るかを探求していく。5学年担任の矢野智子先生はこのようにねらいを説明する。

「『もっと作業時間を短くするためにはどうすればよいか』といった分かりやすい問いに取り組むことで、自分で考えて動く力を育てます。飯ごう炊飯ではいくつもの作業が同時に進むため、自分の担当だけではなく、友だちの仕事の内容や進め方も理解しなくてはな

図　「意思決定学習」の5つの過程

❶問題の明確化
- 教材や子どもたちの必要感から問題場面が設定される。
- 経験や知識を基にして、何が問題かを明らかにする。

❷立案
- 問題を解決するためのアイデアを出し、案を考える。

❸意思の決定
- 複数の案の中から、最善と思うものを選んで決める。

❹実行
- 決めたことを、具体的にやってみる。

❺評価・反省
- 自分（たち）のしたことはよかったかを振り返る。

＊同校の資料を基に編集部で作成

高浜市立翼小学校校長
六角英彰 ろっかく・ひであき
「校長として、授業づくりを楽しんで探求する先生方を後押ししたい」

高浜市立翼小学校
増田洋喜 ますだ・ひろき
研究主任。6学年主任。「子どもに任せること、待つこと、見守ることを大切に指導している」

高浜市立翼小学校
矢野智子 やの・ともこ
研究推進委員。5学年担任。「子どもの『やりたい』という気持ちを最大限引き出せる声掛けや手立てを講じたい」

高浜市立翼小学校
杉浦崇洋 すぎうら・たかひろ
研究推進委員。6学年担任。「子どもの考えを否定せず、自分の意見を持てたことを認めて褒めたい」

りません。話し合いを通して自他の役割を理解し、人のために行動することの大切さも実感してほしいと考えています」

話し合う中で他の作業を知り全体を見通して考えられるように

5つの過程に沿って見ていこう。

①問題の明確化

最初に、カレー作りは、慣れない野外で調理をしなければならないこと、限られた時間であることなど、「条件」への気付きを促す。子どもたちは「かまど」「カレー」「ごはん」のグループに分かれ、作業の手順などの情報を集めた上で、事前に家庭科室や校庭を使って練習を行う。それにより、「思った通りにいかない」課題が見えてくるという。

②立案

事前練習を踏まえ、グループごとにマトリックス計画書の作成に着手した。作業内容「かまど」「カレー」「ごはん」を示した縦軸と、時間「はじめ」「中」「おわり」を示した横軸に沿って、「野菜を洗う」「飯ごうに米を入れる」「火を起こす」などの具体的な作業を書いた付せんを貼っていった（**写真1**）。

また、例えば「カレー」であれば、「ジャガイモ」「ニンジン」「タマネギ」など一つひとつの担当を決め、自分が何をするのかを細かくイメージさせた。作業の手順を互いに確認しながら話し合う中で、「ご飯を炊く準備が出来る前に、かまどの火を起こさないとね」などと、自分の担当以外の仕事にも目が向く姿が見られた。

「一人ひとりの役割が明確な方が、自分の課題と捉えやすくなります。自分の作業を順に追うことで、『この時間は手が空くから、他の作業を手伝おう』という考えも生まれます」（矢野先生）

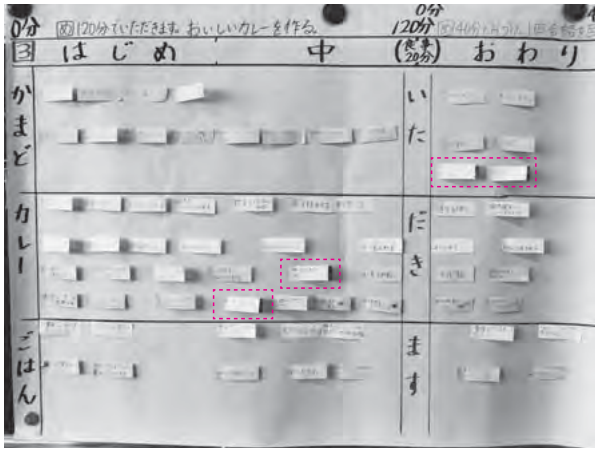


写真1　あるグループのマトリックス計画書。いかに作業を効率化するかを話し合い、何度も付せん紙を貼り直して、それぞれの仕事の手順を決めた。赤い罫線で囲んであるのが「スペシャル付せん」だ

③意思の決定

マトリックス計画書をグループでいったん作成した後、先生から「時間をもっと短くするには、どうしたらいいだろうか」という課題が投げ掛けられた。子どもたちは、友だちの役割でも手伝える内容を、これまでとは異なる色の「スペシャル付せん」に書いてマトリックス計画書に貼っていった（**写真2**）。

子どもからは、事前練習の体験を基に、「火の見守りに3人は必要なかったから、1人は水場の掃除を手伝おう」「使い終わった道具はすぐに洗った方が、後が楽になる」といった意見が出され、作業はより効率化されていった。その間、教師はグループを回り、意見がまとまらない子どもたちをフォローしたり、アドバイスをしたりすることに努めた。

最終的にマトリックス計画書が完成したら、それが一人ひとりの意思を反映したグループの決定事項となる。

「自分1人ではなかなか決められない子どもにはグループのメンバーらが支援しますが、最終的には自分で決めるように促すこと

写真2　「スペシャル付せん」を貼る子どもたちには、「自分の意見で仕事の時間を短くしたい」という強い思いが感じられた

を大切にしています」（矢野先生）

④実行

野外活動の本番では、マトリックス計画書に沿って、子どもたちは作業を進める。自分たちで決めたことであるため、責任感を持ち、進んで行動する姿が見られるという。教師は、子どもに助け合いながら仕事を進めるように促す。

⑤評価・反省

本番を終え、自分が出来たことや予想外だったことなどを振り返る。

課題を自分のことと捉えられるよう問題の明確化を工夫

今年度の研究では、特に導入の「問題の明確化」に焦点を当てている。最初に問題をはっきりさせることで、立案以降の活動が自分の意思を持って展開できるからだ。

問題の明確化に焦点を当てた意思決定学習として、4年生の社会科と「総合学習」で展開した「作ろう！　マイ防災袋」の実践を見てみよう。同校がある地域は東海地震等の30年以内の発生確率が高いといわれており、子どもたちの防災意識を高めることは重要なテーマだ。

この活動の「問題の明確化」では、まず社会科で地域社会における災害や事故の防止について重点的に学習した。東日本大震災のケースを交えて具体的に学び、備えの大切さを十分に実感させた。その過程で防災袋の必要性に気付かせ、その後、「総合学習」では、自分で必要な物資を考えて「マイ防災袋」と名付けた防災袋を作った。6学年担任の杉浦崇洋（たかひろ）先生はこう説明する。

「防災意識を高めるのは重要ですが、それだけでは災害に立ち向かえません。意思決定学習を通し、『自分で考えて動く』『必要なことを決める』といった確かな実践力を育てたいと考えています」

防災袋作りではまず、個々に必要と考える物資を持ち寄った。そこから自分に本当に必要な物を判断できるように、「安全を守る」「人の命を助ける」「家族を見付ける」などの判断基準を考えさせた。その後、学級の話し合いを通して、自分の判断基準を見直し、自分だけの防災袋を完成させた。

「多くの子どもが、地震への備えを自分の課題と捉え、真剣に学習に取り組んでいました。学習を終えた後も、防災に高い関心を持ち続けている様子が見られます」（杉浦先生）

取り組みの成果

他の授業でも自主的に話し合って決める姿が見られるように

意思決定学習を繰り返す中で、子どもたちが自分で考えて動いたり、必要なことを決めたりする姿が目立つようになり、「やれば出来る」という自信が生まれつつある。

例えば、5年生は、「飯ごうマスターになろう！」の後にあった家庭科の味噌汁作りの調理実習で、自主的にマトリックス計画書を作成し、グループで協力しながら作業を進めた。また、市内の陸上大会や校内の持久走大会の前には、自ら計画を立てて練習に取り組む姿が見られた。

授業中の話す姿勢や聞く姿勢も大きく変化しているという。

「意思決定学習は、互いの立案を聞き合う中で自分の行動を決めるため、おのずと友だちの立案の理由や根拠を聞いたり、自分の意見を言ったりしたいという気持ちが起こります。そのため、他の授業でも、根拠を基に話し合って決めようという雰囲気が生まれています」（増田先生）

意思決定学習は、教科学習以外の活動にも取り入れている。例えば、体力測定の1か月前に子どもに前年度の記録を渡し、練習内容を考えさせて記録の向上につなげたという学年もある。そうした活動を共有し、学校生活全体に意思決定学習を広げていく考えだ。

「研究1、2年目は、先生方の中に『自分が引っ張らなくては』という意識がありましたが、徐々に根気強く子どもを見守るようになってきました。今後も個人の意思決定を大切にすると共に、集団の練り合いを通して、子どもの育ちを支えていきます」（六角校長）

考えの過程をふきだしに書き思考を深め、広げる力を育む

千葉県 千葉市立海浜打瀬小学校

以前は、子どもに「答えが合っていればよい」という結果重視の傾向が見られたという千葉市立海浜打瀬小学校。ノートに「ふきだし」を自由に書かせ、教師はそこに表れた思考過程に寄り添いながら授業を進める。子どもが自分たちで考えて学習を進めていくプロセス重視の指導が定着するにつれ、学ぶことの楽しさを実感する姿が見られるようになってきた。

取り組みのねらい

- 自ら問いを持って学びに向かう力や姿勢を育てる
- 子ども同士がお互いの考えに関心を持ち、学び合う関係をつくる
- 算数の本質的な面白さを伝え、もっと楽しく学べるようにする

取り組みの内容

- 「内言」と「外言」をスパイラルに育てられるよう、授業で体験させたい学習言語を吟味する
- 学習中の子どもの姿を意欲面から類型化し、目指す姿を共有する
- 授業中に考えや思いを自由に「ふきだし」に書かせることで、「内言」を表出させる

取り組みの成果

- 教師や友だちの発する言葉への関心が高まり、かかわり合いが生まれた
- 間違いや分からないことを素直に表現できるようになった
- 教師の指導観が変化し、子どもの思考の過程に寄り添う授業づくりが出来るようになった

取り組みのねらい

友だちの意見を聴き、自分の考えを深めていけるように

千葉市立海浜打瀬小学校は、大規模なオフィスビルや高層マンションが建ち並ぶ幕張ベイタウンに2001年に開校した。開発によりさまざまな人が移り住んでできた街のため、地域住民は小中学生とその保護者が中心で、学校が地域づくりの拠点となっている。保護者の教育への関心は高く、子どもの学力は総じて高めだ。私立中学校の受験者は半数近くに上り、塾に通う子どもの比率も高い。引地清人校長は子どもの実態をこう話す。

School Data

◎2001（平成13）年開校。地域の交流や防災の拠点の役割も担い、13年度、文部科学省の防災対策実践モデル校となる。オープンスペースの校舎で子どもたちは積極的に交流している。

校長	引地清人先生
児童数	694人　学級数 23学級（うち特別支援学級１）
所在地	〒261-0013 千葉県千葉市美浜区打瀬3-3-1
TEL	043-211-3330
URL	http://www.cabinet-cbc.ed.jp/school/es/119/
公開研究会	未定

「学びたい！」意欲を伸ばす言語活動

「愛情をたっぷり注がれて育った素直な子どもが多いです。しかし、エネルギーを発散する場が少なく、保護者や教師から期待されるような子どもを演じているのではないかと思うことがあります」

学習面では、「答えが合っていればよい」という結果重視の子どもの姿勢が気に掛かっていたと、教務主任の杉岡潤先生は話す。

「正解を近道で出すことに重きを置き、友だちの発表や別の解き方にあまり関心を示しませんでした。友だちの意見を聴いて考えを深めていく面白さを知らないようでした」

そうした子どもの傾向には、教師側の要因もあったと考えている。教師は20代、30代の若手が7割を占め、以前は講義形式で知識を与えるような授業も多かったという。

「子どもが授業を大人しく聞いてくれるため、教師は自分が話すことが中心になり、子どもが考えを表現する場を十分に与えていなかったかもしれません。校内研究は、それまでの授業のあり方を十分に振り返るところからのスタートでした」（引地校長）

取り組みの内容

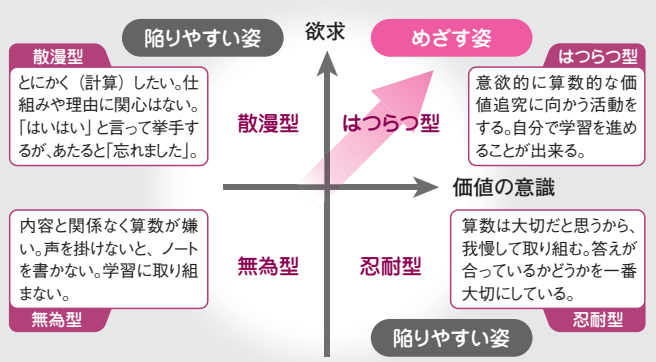
意欲的に価値を追究する「はつらつ型」を目指す

同校は、12年度に千葉市の研究指定を受けたのをきっかけに、「自ら問える子を育てる算数学習」を研究主題にしている。

「算数は子どもが苦手意識を持ちやすい教科ですが、大切だからと我慢して学ぶ様子も見られます。算数の面白さを伝えることで、もっと楽しく、はつらつと学ぶ姿を引き出したいと考えています。また、算数は論理的に考えを整理して表現しやすい教科です。公式や定義により共通理解が図りやすいため、子どもが考えを分かち合いやすい点にも着目しています」（杉岡先生）

研究では、まず教師間で目指す姿を共有するため、意欲面から子どもの姿を類型化した（図）。低学年は学習への参加意欲は高いが、算数の本質的な価値を実感していない「散漫型」が多く、高学年になると我慢して公式や解き方を暗記する「忍耐型」が増えると分析した。算数の楽しさを実感し、自分で問いを持って学習を進める「はつらつ型」に育てるためには、結果ではなく過程を大切にした授業を繰り返し経験する中で、算数の価値を感

図　意欲の面から子どもの姿を類型化した図



「忍耐型」「散漫型」「無為型」の子どもを、算数の価値追究に裏付けられた問いを豊富に持つ「はつらつ型」に育てることを目指す
＊同校の資料を基に編集部で作成

千葉市立海浜打瀬小学校校長
引地清人 ひきち・きよと
「先生方が自らを振り返り、その良さを生かしてはつらつと指導できるようにサポートしたい」

千葉市立海浜打瀬小学校
杉岡 潤 すぎおか・じゅん
教務主任。「教師はリーダーではなく、間違えたときに示唆する存在。教師も子ども楽しい教室にしたい」

千葉市立海浜打瀬小学校
大久保桂 おおくぼ・けい
研究主任。6学年担任。「言葉の中身や発し方を工夫して教室を盛り上げ、毎日来たくなる楽しい学校をつくる」

千葉市立海浜打瀬小学校
谷口浩孝 たにぐち・ひろたか
研究副主任。3学年担任。「各教科の楽しさを教師が実感してこそ、子どもにも楽しさが伝わる」

千葉市立海浜打瀬小学校
村瀬方彬 むらせ・まさよし
研究副主任。6学年担任。「子どもの反応を十分に見取り、自由に意見を交し合える雰囲気を大事にしたい」

じ取らせることが重要と考えている。

子どもが考える手掛かりとなる教師の「外言」を十分に吟味

指導の中心は、「内言（ないげん）」と「外言（がいげん）」をスパイラルに高めていく方法だ。「内言」は思考の手段となる自分自身のための音声のない内的言語、「外言」は意思伝達の手段となる他者に向けられた音声言語と捉えている。

「自ら問いを持てと言われても、子どもは方法を知りません。与えられた外言を取り込んで内言として思考を深め、それを外言として表現する。こうしたプロセスを繰り返し経験する中で、考えたり問いを持ったりする力が育つと考えています」（杉岡先生）

子どもが授業中に与えられる最も重要な外言は、教師の言葉と考えている。子どもは、教師の言葉を思考の手掛かりとして学びを深めていくからだ。そのため、教材研究では言葉の吟味を徹底している。研究主任の大久保桂先生が説明する。

「授業中に体験させたい学習言語を指導案に記入して授業に臨みます。授業の最後には、子どもが学習言語を内言として獲得している状態を目指します」

授業では、教師は学習言語をすぐには口にせず、子どもから出てくるのを待ったり、子どもの言葉をつないで気付くように促す。研究副主任の谷口浩孝先生が説明する。

「教師が一方的に与えるのではなく、子どもとのやりとりの中で一緒に学びの価値に気付くのが基本姿勢です。まだ完成されていなくても学習の本質に迫ろうとしている子どもの言葉を、聞き逃さないようにしています」

例えば、3年生の「2位数×1位数」の授業では、「位（くらい）ごとに分けて計算する」などを体験させたい学習言語に位置付けている。子どもから「位ごと」という言葉が出ずに、「こことここを掛ける」などと、自分なりの言葉で言い表している場合には、それを取り上げて皆でじっくりと考えていく。

「従来の授業であれば、1人か2人の発言を取り上げ、『そうですね。位ごとに計算すればよいですね』と先に進んでいたでしょう。それでは、一部の子どもしか本当の意味では理解できておらず、多くの子どもは暗記するだけになります。私たちが目指すのは、表現として洗練された言葉を全員が獲得するまでの過程を大切にする授業です」（引地校長）

獲得した内言を深めるため、高学年になると、振り返りの時間に「この考えは、生活のどんな場面で使えますか」「次に学びたいことは何ですか」などと質問し、自ら問いを持たせるように促している。

「ふきだし」を自由に書かせ自分の思考に目を向けさせる

内言を深めて外言として表出するために、ノートの余白にふきだしを書いて、考えたことや思ったこと、大事だと思うことなどを自由に記入させる指導もしている（**写真**）。

算数の学習に楽しく取り組んでほしいという思いから、ふきだしは「何を書いてもOK」と伝えている。当初は「量」を書くことで満足する子どもが多く、「暑い」「眠い」など学習とは無関係の内容も少なくなかった。だが、たくさん書くために教師や友だちの話をよく聞くようになると、次第に教科の本質に迫る内容が増え、「質」が高まっていった。

「ふきだしを始めてから、子ども同士が話

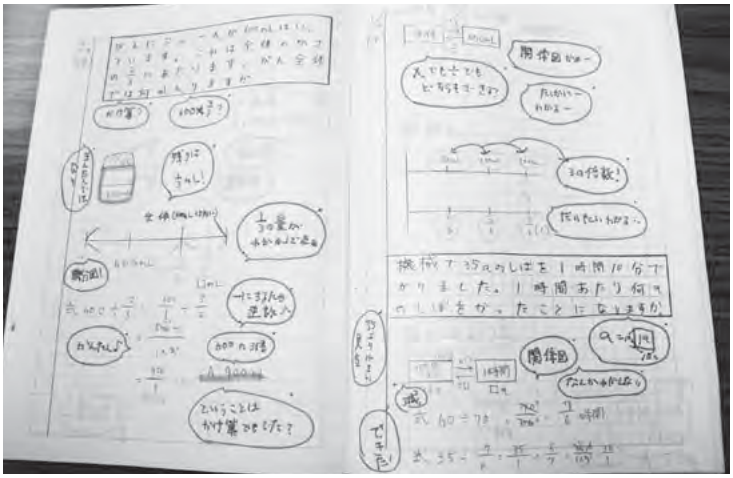


写真　6年生の算数のノート。「なんかわかんない」「できた！」といったつぶやきや、「×でも÷でも、どちらでもできる？」といった疑問がふきだしに書かれている

をよく聞き合うようになり、授業中に飛び交う大切な言葉をキャッチするようになりました。それをふきだしにすることで自分の思考が明らかになり、外言として表すことが上手になってきました」（大久保先生）

教師が授業中に子どもの考えや思いを把握することにもふきだしを活用している。研究副主任の村瀬方彬（まさよし）先生が説明する。

「授業中にノートを見て回り、比較・検討の時間に『Aさんは、こう考えているよ。皆はどう考える？』というように、授業の組み立てに役立てています。また、子どものつまずきも目に見えて分かるので、すぐに指導に生かすことが出来ます」

授業づくりの観点から、「情意」を表すふきだしにも注目している。

「算数の面白さに気付ける授業をすると、『面白い』『楽しい』『不思議だ』といった情意面のふきだしが多く見られます。まるで映画鑑賞後のように、ふきだしに感想が飛び交うような授業を目指しています」（引地校長）

高学年では、担任によって、授業中に自由に立ち歩いて友だちに相談や質問をすることを許可している学級もある。

「子どもによって、『知りたい』『分かりたい』といった知的な欲求が表れるタイミングは異なります。それを、一律に設定された質問タイムまで出さずに我慢することは難しいので、いつでも質問してよいことにしています」（杉岡先生）

子ども同士が相談する際にもふきだしは有効で、同じところに疑問を持つ子どもを組み合わせたり、分かった子とそうでない子を組み合わせたりしている。

取り組みの成果

友だちの考えに関心を持ちかかわり合いが生まれる

発問の吟味やふきだしなど言葉を大切にする指導を通じて、子どもが教師や友だちの話への関心を高めているのは大きな成果と捉えている。以前は、個々に学習を進めて周囲とかかわろうとしない子どもも見られたが、今では友だちとふきだしを見せ合い、思いやつまずきを共有し、学び合う姿が見られるようになった。

「間違いや分からないことを素直に書いたり、話したりできる子どもも増えてきました。皆で間違いの過程をたどるような姿も見られます」（谷口先生）

算数以外の教科でも自主的にふきだしを活用し、思考を深めている子どももいる。卒業生が遊びに来て「中学校でもふきだしを使っているよ」と、うれしそうにノートを見せてくれたこともあったという。

研究を通して指導観が大きく変化した、と話す教師は多い。

「以前は、授業中に子どもの反応が悪いのは、子どもの集中力不足などが要因と考えていました。しかし、指導によって、子どもの反応が全く変わることを目の当たりにしたことで、授業がうまくいかないのは自分の指導に課題があると捉えるようになりました。事前の発問の検討や教材研究の大切さを、改めて感じています」（村瀬先生）

教材研究を充実させる中で、授業のつくり方も根本的に変わってきた。

「以前は基本的に教科書に沿って教えていましたが、授業で付けたい力やキーワードを踏まえると教科書の流れが必ずしもベストではないことがあります。そういう時は、順番を変えたり、教材を追加したり、教科書では2時間分の内容を1時間にまとめたりすることがあります」（谷口先生）

14年度は、ふきだしなどから明らかになった子どものつまずきの要因を明らかにし、指導を見直していくことも重視している。

「表の書き方だけを教えるのではなく、表にすることの価値を教えることが、本来の教師の役割と言えるのではないでしょうか。そういう本質的な指導によって子どもの理解は深まり、主体的な学びにつながるでしょう。時間を使う場面の見極めは必要ですが、一人ひとりのふきだしを十分に検討することで、あるべき授業の姿をもっと追究していきたいと思います」（引地校長）

言語活動を通して思考過程重視の学習観を育む

ベネッセ教育総合研究所「小中学生の学びに関する実態調査」の結果から

子どもに主体的に学ぶ力を育むために、どのような学習観を身に付けることが望まれるのか。ベネッセ教育総合研究所が行った調査の結果から見えてきたことを報告する。

ベネッセ教育総合研究所 初等中等教育研究室 主任研究員
邵勤風 しょう・きんふう

◎初等教育領域を中心に、子ども、保護者、教員対象の意識や実態に関する調査研究を行う。「学習基本調査・国際6都市調査」「第3回子育て生活基本調査」などを担当。

「21世紀型能力」「主体的に学ぶ力」の育成が今、求められる

今、教育分野では、21世紀に求められる素質・能力を定義し、それに基づいた自国のカリキュラムを開発する取り組みが、世界の潮流となっています。

日本でも、国立教育政策研究所が「21世紀型能力」として、「思考力」を中核に、それを支える「基礎力」、方向付ける「実践力」という三層構成を提案しました（＊1）。文部科学省が示す次期教育課程の改訂の趣旨（＊2）の中にも、「高い志や意欲を持つ自立した人間」「他者と協働」「今後の社会を生きる力として求められる資質・能力」「主体的な学習意欲」「主体的に学ぶ力」といったキーワードがあります。そのため、次期教育課程の改訂では、学習意欲を持って主体的に学ぶ力の育成という視点が一層強化されると考えられます。学校現場では、教科内容の指導と共に、「いかに学ぶか」や「なぜ学ぶのか」を考えさせる指導も求められるでしょう。

そのような動向を踏まえ、ベネッセ教育総合研究所では、「小中学生の学びに関する実態調査」を行いました。子どもが主体的に学ぶために、どのような学び方（学習方略）を身に付けて、どのような学習観を育めばよいのか。その把握を目的にしています。ここでは、言語活動に関連する調査結果を紹介します。

「相手の考えを聞く」8割「意見をまとめる」5割弱が得意

本調査では、基礎的・基本的な知識・技能を測る項目として、成績の自己評価について尋ねています。更に、思考力・判断力・表現力に関して、子どもの実態の把握のために「得意なこと」を尋ねました。

各項目について「得意」と答えたのは5割弱～8割と、全般的に高いのが1つの特徴です（図1）。ところが、「とても得意」だけを見ると、「友だちの考えをきちんと聞く」「計算問題を解く」「実験や観察から分かったことをまとめる」に比べ、「自分の考えを分かりやすく説明する」（17・5％）、「みんなの意見をまとめる」（15・7％）は低くなっています。

友だちの考えを聞くことは得意と感じている一方で、自分の考えを説明したり、友だちの意見をまとめたりすることには、やや苦手意識があることが読み取れます。自分の考え

＊1　国立教育政策研究所「社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原理」（教育課程の編成に関する基礎的研究報告書5）（2013年3月）
＊2　文部科学省中央教育審議会（第90回）配布資料　資料1　教育再生の実現に向けて（その4）（2014年3月）

「学びたい！」意欲を伸ばす言語活動

を分かりやすく伝える力、みんなの意見をまとめる力は、21世紀型能力の重要な要素でもあり、今回の特集で紹介しているような言語活動を通して育むことが出来るのではないでしょうか。

「思考過程重視の学習観」と「聞く・伝える・まとめる」力は相関関係

次に、得意なこと（思考力・判断力・表現力）と学習に対する意識（学習観）との関係を見ていきます。ここでは、学習観を8つの志向（**図2**）を基に項目を設定し、学習に対する意識を尋ねました。

図3を見ると、「問題の解き方を考えたり、難しい問題をじっくり考えたりする」という思考過程重視志向が高い群の方が、低い群より相手の考えを聞いたり、自分の意見を分かりやすく伝えたり、みんなの意見をまとめたりすることが「得意」と回答した割合が高くなっています。思考過程重視志向が低い群と比べると、約20～30ポイントと大きく差が開いています。思考過程を重視することと、聞く・伝える・まとめるといった力が関係していることが分かります。

このことから、学校だからこそできる学び方――他者とかかわり合いながら、人の考えを聞き、自分の意見を分かりやすく伝え、みんなの意見をまとめる活動を通して、結果重視ではなく、思考過程重視の学習観を子どもたちにもっと伝えていく必要があると考えます。それらの活動を通じて、「21世紀型能力」や「主体的に学ぶ力」が育まれていくのでしょう。

将来学校を卒業しても、高い意欲を持ち、自ら学び続けられるように、小学生のうちから学習に対する基本的な姿勢や正しい考えを育てていくことが大切です。授業における言語活動が、まさに主体的に学ぶ力を子どもに付けるための機会となることを期待したいと思います。

図1　得意なこと

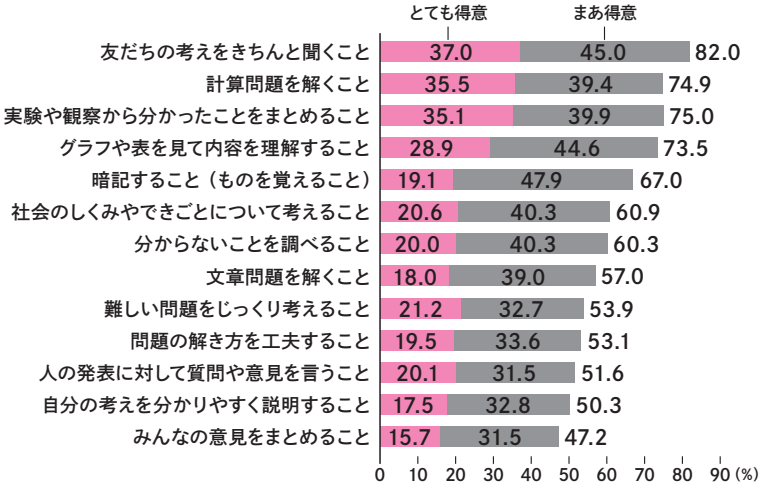
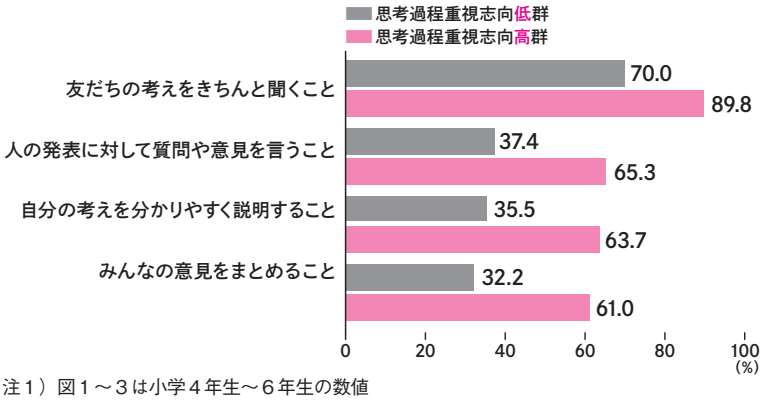


図2　学習に対する意識（学習観）

- **意味理解志向**……「なぜ」かを考えながら勉強する
- **丸暗記志向**……テストに出そうなところを丸暗記する
- **思考過程重視志向**…難しい問題をじっくり考える
- **結果重視志向**……とにかくテストの点数が高ければいい
- **方略志向**……自分に合った勉強方法を考える
- **練習量志向**……たくさんの問題を解く
- **失敗活用志向**……間違いを振り返り次の学習に生かす
- **環境依存志向**……分らないことはすぐ誰かに教えてもらう

図3　得意なこと×思考過程重視志向の学習観



注1）図1～3は小学4年生～6年生の数値
注2）図3の数値は「とても」＋「まあ」得意の%
出典／ベネッセ教育総合研究所「小中学生の学びに関する実態調査」（2014年2～3月。小学4年生～中学2年生の子ども及びその保護者各5,409人。郵送法による自記式質問紙調査）

Teachers' cafe発
特別企画

ワークショップ型の校内研修で同僚性を育み、学校力を高める

「いつもの会議」から一歩抜け出し、「気軽にまじめな話をする場」を設けることで、
同僚の先生たちが「多彩な同志」であることを認め合い、支え合うような関係をつくっていきませんか。
ベネッセ教育総合研究所主催の「Teachers' cafe」で得た課題意識と成果を基に、
同僚性を育み、学校力を高める研修法をご紹介します。

こんな学校にお勧め！

- ☐ 教員同士のコミュニケーションを活発にしたい
- ☐ 目的や目標、ビジョンをしっかり共有したい
- ☐ 教員の仕事に誇りを持って、いきいき働きたい
- ☐ 自らが考え、行動するチームをつくりたい
- ☐ 楽しく協力しながら子どもと向き合える学校にしたい

編集部より

教師としての原点を語り合い、チームの一体感を高める

Teachers' cafeは、小中高の先生方が学校種や立場を超えて教育について思いを語り合う場として、2013年度に始めました。全国から集まった先生方は、学校種を超えて率直に思いを語り、「他校種、他地域の先生でも共通する思いはたくさんあった」「前向きな議論を通して、新しい知見を得ることが出来た」という声をいただきました（＊1）。

それは同時に、普段の学校では、教育への思いを十分に語る機会が限られていることを示しているように感じました。日々の指導や校務に忙しくても、自分が大切にしたい原点や子どもに身に付けたい力につながるならば、それが無駄に忙しいとは感じないでしょう。しかし、そうした自分の思いや指導の意義を確認する機会がないために、日々、多忙感だけが募っているのではないでしょうか。

また、小誌での取材を通して、教員同士の一体感が以前よりも感じられないことを、課題に挙げる先生が少なくありませんでした。組織の風土改革を専門とし、Teachers' cafeの企画・運営に携わっている株式会社もくてきの與良昌浩氏によると、チームとしての人間関係は、下図のような5段階のレベルで示されるといいます。レベル4や5だと思える先生が、周りにいるでしょうか。強い集団は共通の目的を持っています。それが同僚性やチームワークを生み、悩みを相談したり、助け合ったりする風土をつくっていくのではないでしょうか。

今回、與良氏の協力を得て、校内で出来るワークショップ型の研修法を考えました。この方法は、3人以上集まれば行えます。最初は同じ課題意識を持っている仲間と始めて、その効果を感じたら仲間を増やし、徐々に校内に広げてみてはいかがでしょうか。研修は2回分で設定していますが、学校の状況に応じて、1回目だけ行ったり、メンバーを変えて2～3回行ったりしても、職場の雰囲気がより良く変わっていくでしょう。

周りの先生方との関係は次のどのレベルにありますか。

- レベル1　顔を知っている
- レベル2　気軽に会話できる
- レベル3　真剣に悩みを話せる
- レベル4　共通の目的を持っている
- レベル5　共通の目的に向かって相互支援している

＊1　Teachers' cafe当日の様子については、Teachers' cafeウェブサイトをご覧ください。http://berd.benesse.jp/tcafe/

ワークショップ型校内研修の方法

1回目 関係性を深める ▶時間のめやす60分

・今回の例では、４人参加で60分に収まるように設定しました。時間はめやすとして、参加人数や使える時間に応じて調整してください。

◎教師として日々どんな課題を感じているのか。１回目は、各人の思いや考えを存分に発散させ、互いのことを深く知り合います。安心して話すことの出来る関係性をつくることで、２回目の議論や普段の会議が活性化していきます。

- ３～４人ずつのグループをつくります。少人数の方が、一人ひとりが話す時間を多く確保でき、自分の思いをしっかり語ることが出来ます。議論ではなく、「対話」を心掛けます。
- ファシリテーター（進行役）を決めましょう。全員が思いを発散させるためにも、進行管理は重要です。
- 用意するもの…タイマー、メモ用紙を２枚×人数分

1 目的の共有、ルールの確認 5分

◎今回のワークショップの目的を共有します。

例：「応援し合えるヨコの関係をつくるために、まず自分自身のことや今思っていることを語り合ってみましょう」

◎話し合いのルール「ワークショップで大切にしたいこと」を確認します。

ファシリテーターのポイント

- 「ワークショップで大切なこと」をしっかり伝えましょう。安心して話せる場ができれば、普段は話さないことも話しやすくなります。

2 自分を語る 1人8分×人数

◎自分が思っていることを好きなように語ります。とにかく思いつくままに話し出してみましょう。話しながら自分の考えや思いが整理されていくこともあります。

◎８分間は、話す人が主人公になる時間です。語り終えたら、聴いている人は質問をしたり、感想を伝えたりしましょう。

ジブンガタリ（＊2）＞どうして先生になったの？　先生になってうれしかったこと、失敗は？

モヤモヤガタリ＞指導する中で感じるモヤモヤ（違和感・疑問）は？

ミライガタリ＞子どもにどうなってほしい？　どんな先生になりたい？

ファシリテーターのポイント

- 時間が来たら話を終え、全員で拍手をするように促します。
- モヤモヤガタリは、解決しようとせず、共有することを目的にします。

3 気付いたことのシェア 1人2分×人数

◎各人のジブンガタリを聴いて、自分が気付いたこと、学んだことをグループ内で発表し合います。ほかの人の気付きを聴くことで、視野が広がりますし、自分の学びの確認にもなります。

4 今日の気付きを書き留める 5分

◎今回のワークショップで自分が気付いたことや学んだことを、メモ用紙に書き留めます。きちんと文字にしてアウトプットすることで、更に気付きが促されます。

5 次回、話し合いたいテーマを挙げる 10分

◎次回、みんなと話し合いたいテーマを、一人ひとりメモ用紙に書きます。参加者全員で見せ合いましょう。参加人数が多い場合は、テーマが近い者同士、３～４人のグループをつくり、次回はそのメンバーでグループワークを行います（話し合うテーマ例はP.24参照）。

お疲れ様でした！

ワークショップで大切にしたいこと

1. 自分の感じていることを素直に話す
   人が感じていることに
   良い・悪いや正解はない！
2. 相手の話を真剣に聴く
   好奇心の矢印を相手に向けよう！
3. 評価・否定・批判はしない
   合いの手、うなずき、笑顔、大歓迎！
4. 同じ目線で一緒に悩み考える！
5. ここでの話を他人に言ったり、
   偏見を持ったりしない！

時間が長めに取れるなら

◎参加人数が多く、ワークショップの時間を90分、120分と確保できたら、「ジブンガタリ」「モヤモヤガタリ」「ミライガタリ」を、グループを替えながら行ってもよいでしょう。より多くの人の思いを共有できますし、１人５分ずつでもテーマごとに話すことによって、思いを深められます。

例：「ジブンガタリ」（５分）→グループ替え→「モヤモヤガタリ」（５分）→グループ替え→「ミライガタリ」（５分）

＊2　「ジブンガタリ」は、（株）スコラ・コンサルトの登録商標です

2回目 課題解決への意欲を高める

▶時間のめやす 60分

◎2回目は、1回目で見いだしたテーマについて議論します。テーマに対する一人ひとりの思いを発散させ、みんなの思いを束ねていくことで、目的を共有し、課題解決への意欲を高めていきます。

- 1回目の最後に、話し合いたいテーマをつくったグループで集まります。
- ファシリテーター（進行役）を決めます。発言していない人がいたら、話すように促す配慮が必要です。
- 用意するもの…タイマー、模造紙（またはホワイトボード）×グループ分、メモ用紙×人数分

1 目的の共有、ルールの確認 5分

◎今回のワークショップの目的を共有します。
例：「今回は、前回出てきたテーマについて議論を深め、これからしたいことについて目線を合わせたいと思います」
◎「ワークショップで大切にしたいこと」（P. 23 参照）を確認します。

ファシリテーターのポイント

- 「ワークショップで大切にしたいこと」は1回目と同じです。同じことだからと省略せずに、再度伝え、話しやすい雰囲気をつくることが重要です。

2 テーマについて現状を共有する 発散 15分

◎各人がテーマについて思っていることを自由に話しましょう。それぞれの思いなので、ばらばらでも構いません。模造紙などに書いていきます。
◎要望や期待、不満なども出てきますが、現状を共有することが目的です。事実と意見を分け、また、他の人の発言を否定しないようにしましょう。

ファシリテーターのポイント

- 発言していない人がいたら、話すよう促してみましょう。ただ、発言したくない場合は、パスも認めましょう。
- 最初に付せんに考えを書き留め、貼っていく方法でもよいでしょう。

3 テーマについて、ありたい姿を話し合う 発散 15分

◎現状を共有した後は、テーマについて、どうあったらよいのか、考えを出し合います。理想でも、期待でも、実現が難しそうなことでも、思っていることは発言してみましょう。

4 話し合ったポイントを言葉にまとめる 収束 10分

◎ありたい姿に近付くために重要だと思うポイントをまとめます。絞り切れなければ、仮で決めても構いません。テーマに対してなるべく端的に言い表せるように、グループでまとめていきます。

5 全体で話し合ったことを共有する 発散 10分

◎グループが複数ある場合は、各グループで話し合った内容を全体で発表し、共有します。模造紙などを見せながら発表するとよいでしょう。

6 これからやってみたいことを書く 収束 5分

◎今回のワークショップで自分が学んだこと、テーマについて今後、自分でやってみたいことを文字で書き留めます。今回のワークショップで得たもの、思いを大切にしましょう。

お疲れ様でした！

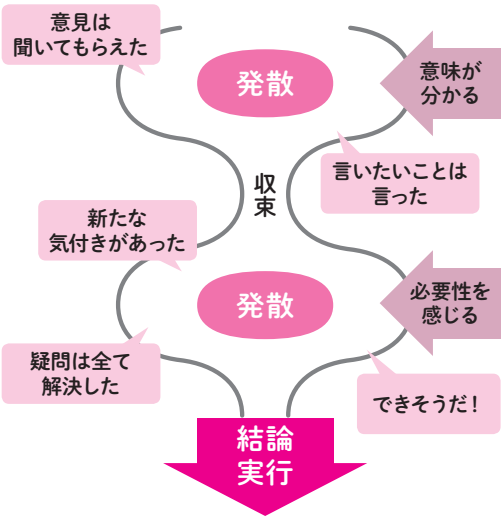
話し合うテーマ例

◎授業改善の進め方
◎保護者との関係のあり方
◎子どもに身に付けてほしい力

考えは模造紙にどんどん書き留めます

いたずら書きOK。遊び心を持って！

各人の思いを発散することが実行へのエネルギーとなる！



楽しく、まじめに対話する場を通して課題解決や未来創造に自ら動き出せるように

株式会社もくてき代表取締役、
株式会社スコラ・コンサルト　プロセスデザイナー　**與良昌浩**

よら・まさひろ
大手商社、大手コンサルティング会社などを経て、現職。

課題がありつつも一歩踏み出すことで変化が生まれる

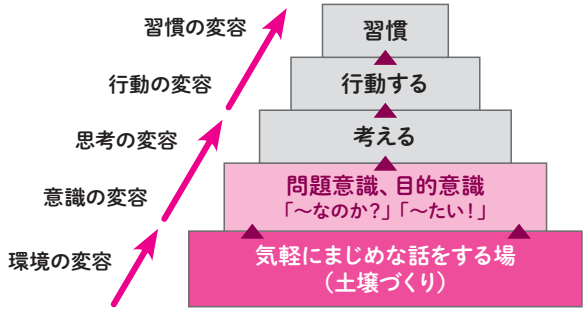
私は、組織の風土改革を支援する仕事をしています。これまでいくつもの学校を訪れ、先生方の研修や生徒たちのワークショップに携わってきました。そこで感じたのは、学校組織も、職場として抱えている課題は企業と同じということです。ただ、先生方は、職業としてこうあるべきという社会的な期待も大きく、また先生自身の理想も高いため、なかなか本音を話しづらいという環境があるのではないでしょうか。

2013 年度に行った Teachers' cafe では、「意識の高い先生が集まり、校種や立場が関係のない特別な環境だから、参加者は自由に話せるのだ」という声も聞かれました。確かにその通りです。同じ手法を自校で行うことは難しいと思うのは当然です。しかし、実際には、隣の席の人でも自分のことを語り合う機会は少なく、このようなワークショップを通じて初めて「そんなことを考えていたんだ」と驚かれる場面を数多く見てきました。

うまくいかないかもしれない。でも、そうした課題意識を持ちつつも、まずは実践してみることが大切だと考えています。失敗したら次の方法を考える、うまくいったら繰り返しやってみる。何かをやり、積み重ねることで、学校という組織も確実に変化していきます。

1 回目のワークショップでは、同僚性を育むことに注力し、安心して話せる環境をつくる工夫をしています。最初に行う「ジブンガタリ」では自分のことを話すので、聞き手は批判のしようがありません。そうすることで、「自分を受け入れてくれる」という感覚をつくっているのです。更に、思いや悩みを共有することで、人は心の距離が縮まります。そうして人のつながりの質を変えていくのです。

■問題意識や目的意識は進化のエンジン！



話し合いによって、問題意識や目的意識が動き出すと、必要な情報や経験がまとわりつくようになり、その意味や価値も変わっていく。課題について考えるようになり、次第に行動の変化にも結び付く。

結論に納得して力を尽くすための対話

2 回目のワークショップは、課題認識とありたい姿を共有することに注力しています。解決策はその糸口が見付かればよい、くらいの気持ちで話し合うのがポイントです。なぜならば、1 度思いを発散させておくことで、決定事項に対して、たとえ自分の考えが反映されていなくても納得し、その実行に力を尽くせるからです（P.24 右下図）。一見、生産性のないワークショップでも、一人ひとりの意欲を高めるためには効果的なのです。

発散の過程では、混沌（こんとん）や混乱が見られるかもしれません。それは、収束への過程の 1 つとして必要と捉えてください。「言いたいことを言い、疑問を解消し、新たな気付きを得て、結果的に課題解決へと自ら動き出す」そうしたワークショップの目的を、最初に説明するとよいでしょう。

ワークショップ型の学びは、大学の授業や企業の研修で盛んに取り入れられており、子どもたちが今後経験していく学びの形態の 1 つです。教師としてそうした新しい学びを体験するという意味でも、このワークショップ型の研修をぜひ取り入れてみてください。

実践レポートをお寄せください！　応募者から抽選で100名様に書籍をプレゼント

校内でワークショップ形式の研修をどのように行ったのか、ご報告をお待ちしております。ご報告をいただいた方の中から抽選で 100 名様に、Teachers' cafe の監修をする與良昌浩氏の最新著書『他人の思考の 9 割は変えられる』（マイナビ新書）をプレゼントいたします。ご応募は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトからお願いします。

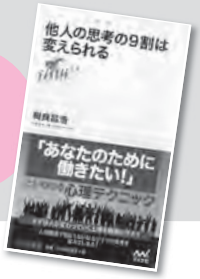
http://berd.benesse.jp/tcafe/

Teachers' cafe　ベネッセ　で　検索

締め切り
2015 年 1 月 9 日（金）着

＊『これからの幼児教育』『VIEW21』小学版・中学版へのご応募から抽選で 100 名様にプレゼントいたします。
＊当選者の発表は商品の発送をもって代えさせていただきます（お届けは 2015 年 2 月上旬を予定）。
＊商品のお届けは、応募された方の勤務校宛てとなります。ご自宅への発送はいたしかねますのでご了承ください。

より詳しい考え方や手法が満載！



全員が意見を出し合える ジグソー法で考えを深める

埼玉県久喜市立江面第二小学校

今号の特集でテーマに取り上げたように、言語活動の活性化は多くの学校が課題に挙げている。活動にはさまざまな方法があるが、協調学習の1つの方法として、「東京大学 大学発教育支援コンソーシアム推進機構」が推奨するのが、「知識構成型ジグソー法」だ（＊）。仲間とのかかわりの中で、さまざまな知識を統合して自分なりに答えを導き出すという実践を紹介する。

「『森林がなくなると食べ物がなくなって、動物が絶滅してしまう』でいいかな」「まとめるのは『役割』についてだよ」「じゃあ、こう？」「大事なところは赤字で書こう」

これは、久喜市立江面第二小学校6年生の理科の授業でのグループ学習の様子だ。この日は、単元「生物のくらしと環境」の導入として、「森林は、生物が生きる上で、どのような役割を果たしているのだろうか」を課題に、「知識構成型ジグソー法（以下、ジグソー法）」による授業を行った。

授業の冒頭で、森林伐採の世界状況を説明する映像を見た子どもは、課題に対するその段階での考えをワークシートに書いた。次に、「A 沖縄県山原の赤土流出」「B 生物が絶滅する原因」「C 森林と空気の関係」「D 地球温暖化」の4班に3人ずつ分かれ、班ごとの小課題について調べ学習を行った。教師が用意したウェブサイトの資料を読み、話し合いながら、小課題の答えを書いていく（**写真1**）。続いて、A～D班から1人ずつ集まって新たに3つの班を作り、今度は全体課題の答えを出すために話し合った。4人はそれぞれが調べてきたことを説明し、顔を寄せ合い、一生懸命考えて、答えをまとめていく（**写真2**）。

最後に、3つの班がそれぞれまとめを発表し、それらを聞いた上で一人ひとり自分の考えをワークシートに書く。冒頭では、「生物のすみか」「酸素をつくる役割」など単語の羅列だった考えが、話し合いを経て「森林は僕たち生物に必要な空気、食料などを生み出している。だから、森林のおかげで生き物は生きている」など、論理的な文章になっていた。授業を担当した松本千春先生は、ジグソー法の良さをこう話す。

「みんなが同じ知識を持って1つにまとめるグループ学習とは違い、各人が異なる知識を持つジグソー法では、話し合いが全員の意見を出し合う場になります。更に、課題解決には各知識を統合する必要があるので、特定の子どもの意見に引っ張られにくく、多様な意見が出て、課題への理解が深まりやすいと感じています」

異なるピースが話し合いを活性化させる

ジグソー法は協調学習法の1つだ。ある

＊「大学発教育支援コンソーシアム」（CoREF）の「知識構成型ジグソー法」については右記ウェブサイトをご覧ください。http://coref.u-tokyo.ac.jp/archives/5515

School Data

埼玉県久喜市立江面第二小学校

◎ 1954（昭和29）年開校。学校教育目標は「進んで学ぶ子、思いやりのある子、健康で明るい子」。1学年1学級の小規模校の特色を生かし、児童一人ひとりに目を向ける指導を心掛けている。 **校長** 関口美重子先生／**児童数** 64人／**学級数** 6学級／**所在地** 〒346-0027 埼玉県久喜市除堀1380／**TEL**0480-22-8237／**URL** http://www.kuki-city.ed.jp/ezura2-e/

Teachers

久喜市立江面第二小学校校長
関口美重子
せきぐち・みえこ　「子どもが夢と希望を育む学校であるために、先生方も笑顔で幸せを感じる学校をつくっていきたい」

久喜市立江面第二小学校
松本千春
まつもと・ちはる　教務主任。「自分から明るく元気なあいさつができ、苦手なことにも積極的にチャレンジする子どもを育てたい」

課題について、複数の視点で書かれた資料をグループに分かれて読む「エキスパート活動」、そこで得た知識を交換し、パズルのように統合しながら、課題について学び、考えを深めていく「ジグソー活動」、学級全体でグループの意見交換をする「クロストーク活動」の3つの活動から成る。

松本先生は2013年度、埼玉県教育委員会の研修会で初めてジグソー法を知った時、ジグソー法の学習が可能なのは、学級全体の学力がかなり高い場合に限られるのではないだろうかと思った。ところが、研修の一環で5年生（現6年生）の理科の授業で実践したところ、普段は目立たない子どもが話し合いを引っ張ったり、それまでのグループ学習ではうなずくだけだった子どもが発言して話の流れが変わったりする場面を目の当たりにし、驚いたという。

上／写真1　エキスパート活動では、1班3人で4つの班に分かれ、それぞれの課題について調べ学習を行う　右／写真2　ジグソー活動では、エキスパート活動で得た知識を持ち寄って、課題について話し合う。ホワイトボードに皆で答えをまとめて書いていくが、言葉1つに対しても、何がよいか意見を出し合い、練り上げていた

「教師が、子どもが考えられる課題を提示し、それに応じた資料を用意すれば、子どもは周りからの刺激を受け、自分たちだけで話し合えるのだと実感しました。固定観念で子どもを見てはいけないことを、改めて突き付けられました」（松本先生）

松本先生の授業を見た5年生の担任が、その効果を感じ、国語と社会でジグソー法での授業を実践した。それらの授業を見た関口美重子校長は、自身がグループ学習に抱いていた課題に対する1つの切り口になるのではないかと思ったと話す。

「私も担任を持っていた時にグループ学習を行いましたが、資料などから切り取った知識を持ち寄るだけの話し合いになり、理解が不十分な子どもがいても話が進んでしまうことを、課題に感じていました。ところが、自分の調べたことが課題解決の重要なピースになるジグソー法では、それを根拠に補足し、反論するなど、互いの意見を聞き、考えを深め、納得して、自分の意見を持つという姿が見られました」

導入で取り入れ、学習動機に結び付ける

ジグソー法を取り入れる場面は単元の導入が良いと、松本先生は考える。自分で調べたことで、その後の学習に課題意識を持つと共に、実感を伴って取り組めるからだ。

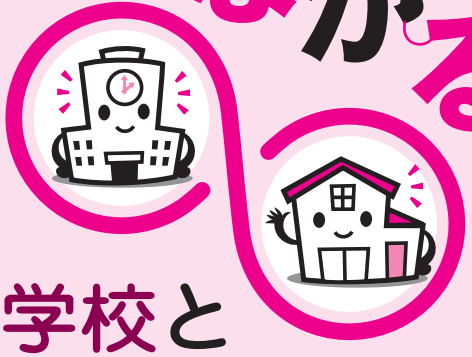
更に、ジグソー法では課題設定と提示する資料が重要になる。今回は、今後展開する「空気、水、食べ物」のキーワードが出るように考えたが、話し合いを活性化させ、本質に気付けるようにするために、わざと遠回りしてアプローチできる課題は何か、何度も練り直した。エキスパート活動で使用する資料も、易しすぎず難しすぎず、適切なものを探すのに時間を掛けたという。

「今日の子どもの様子を見ていると、話し合いの内容にかなり満足しているようでした。話し合いには時間が掛かるというイメージがありますが、単元構成をきちんと計画すればジグソー法の導入は難しくないと考えます。今後は、45分の授業時間内に収まるようにするために、どう工夫していくかを考えていきたいです」（松本先生）

作成した課題や資料、ワークシートは、来年度以降も実践して、同様の成果が見られるのか様子を見ていくつもりだ。

「ジグソー法は、教科の学力に加えて、コミュニケーション能力、課題解決能力、学習の動機付けなど、子どもにさまざまな力が付く学習法だと捉えています。今後も、他教科・他学年の教材作成や授業公開に取り組んでいきたいと思います」（関口校長）

つながる



学校と家庭の学び

小中一貫の「学びの架け橋」で家庭学習の意欲と習慣を育む

兵庫県姫路市立四郷（しごう）小学校・四郷中学校

姫路市立四郷小学校は、同じ地区にある同市立四郷中学校と合同で、子どもの学習意欲を伸ばす取り組みに力を入れている。小学1年生から中学3年生まで9学年分の家庭学習をまとめた「学びの架け橋」を毎月発行し、学期末に算数と国語の基礎力を養う小テストを実施するなど、きめ細かい取り組みを行っている。

中学生との交流を通して小学生に目標を示す

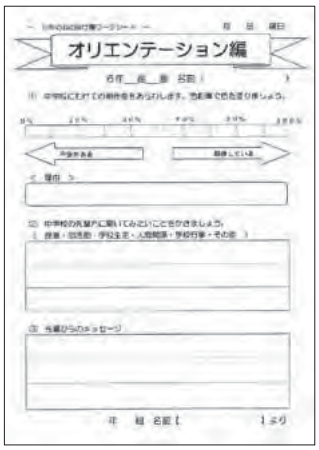
姫路市立四郷（しごう）小学校と同市立四郷中学校は隣接した敷地に建ち、また1小1中であることから、以前から教師同士が情報交換をしてきた。2010年度には行事や学習活動などにも合同で取り組み始め、14年10月の「小中一貫教育全国サミット」では共同研究発表を行う。両校の連携について、四郷小学校の西田耕太郎校長は次のように話す。

「四郷地区の子どもは固定された人間関係の中で育つため、『運動ではあの子にかなわない』など、努力するのを諦める様子が見られました。中学校と交流を深めれば、小学生は中学生を目標とし、中学生は小学生の手本になろうと、互いに頑張るはずです。子どもが自分を変えるきっかけになればと考えています」

6年生と中学生との交流活動の1つ「心の架け橋」は、授業などを見学する1日中学校体験（11月）、部活動体験（11月・2月）などを、9月の運動会以降に5回行う。毎回の活動後には、6年生がワークシート（図1）に活動の感想のほか、中学校生活への期待や不安などを書く。これを担任が回収して中学校に渡し、中学生にコメントを書いてもらう。組み合わせは回ごとに異なるが、いつも6年生1人に対して中学生1人が返事を書くマンツーマン形式だ。6年生には中学校での目標を見付けてほしいと、四郷小学校・小中一貫教育担当の上野裕哉（ひろや）先生は話す。

「中学校で体験して抱いた疑問に中学生が答えてくれれば、6年生は中学校生活をより具体的にイメージで

図1　「心の架け橋」ワークシート（オリエンテーション編）



「心の架け橋」の第1回（9月）の「オリエンテーション」では、担任が中学校の授業や部活動について話し、子どもがワークシートに中学校に対して抱く期待度とその理由、中学生に聞いてみたいことを記入する

＊同校の資料をそのまま掲載

きるようになります。毎年、運動会という大行事が終わると気が緩んでしまう6年生がいますが、中学校進学後の目標を持てば、最後までしっかり小学校生活を送ることにもつながるはずです」

子どもに必要な家庭学習内容を保護者に具体的に伝える

学習習慣の定着にも、小・中学校が連携して力を入れる。四郷中学校の学習目標である「自分の弱点を把握し、自分で計画を立てて学習できる」ことを実現できるよう、四郷小学校では発達段階に応じて学習目標を次のように定めている。

■**低学年**：学習道具の準備を徹底できる。

■**中学年**：宿題などの提出物をきちんと出せる。

■**高学年**：宿題以外の自主学習を習慣化できる。

月1回発行する家庭学習通信「学びの架け橋」（P.30図2）には、家庭で重点的に取り組んでほしい学習内容を小学1年生～中学3年生まで1枚に記載し、これを参考にして子どもに学習を促すよう、保護者に呼び掛けている。

「今までは、『家庭でどのような学習をさせればよいかが分からない』という声がよく聞かれました。そこで、保護者が子どもに声を掛けやすくなるように、家庭で必要な学習内容を授業進度に合わせてこまめに変えながら、毎月具体的に示しています。9学年分を一覧で見ることで、子どもがこの先どのような学習をすることになるのかも見通せると、保護者からも好評です」（上野先生）

各学期末には、9学年一斉に算数と国語の小テスト「SKY（＊）」に取り組む。算数は計算問題、国語は漢字の書き取り問題で、いずれも、その学期の学習内容10問と、小学2年生以上は前学年での学習内容10問を加えた20問から成る。この取り組みの初年度に両校の教師が話し合い、9年間で必要とされる学力を段階的にしっかり身に付けられるように、各学年・学期で最重要となる内容を厳選し作成した。子どもの学力を経年比較できるように、毎年同じ問題を出す。答案は、担任が採点後、保護者会で保護者に返却する。

「先生方には、子どもがつまずいている箇所と対策の仕方を保護者に丁寧に説明してほしいと伝えています。子どもに必要な学習がはっきり分かれば、保護者は長期休業中も子どもに声を掛けやすくなると考えています」（西田校長）

14年度には、子どもが家庭で落ち着いて学習する環境を整えられるように「No！ メディア・ウィーク」も設けた。これは、子どもがテレビやゲームなどのメディアの使用を控える期間で、年5回、四郷中学校の定期考査前の1週間を充てる。期間中は毎日、子どもがテレビの視聴時間などをチェックカード（P.30図3）に書き、期間終了後に担任に提出する。取り組みの意義を、四郷小学校の引地（ひきじ）良典教頭は次のように話す。

「友だちと一緒に行う無料通信アプリケーションなど、1人ではやめづらいメディアもあります。そこで、学校が家庭と一体となり、メディアから離れることを子ども全員に促せるような体制をつくりました。更に、中学校と一緒に取り組むことで、兄姉がいる家庭でも効果が上がると期待しています」

＊「四郷・計算・夢を叶えよう」、「四郷・漢字・夢を叶えよう」の頭文字を取って「SKY」と命名

SCHOOL DATA

兵庫県姫路市立四郷小学校

◎1947（昭和21）年、四郷国民学校を改称して開校。兵庫県の南西部に位置する。姫路市立四郷中学校と小中一貫教育を推進。2014年10月30・31日の2日間にわたって行われる「小中一貫教育全国サミット in 姫路」（詳細は下記URL）で研究発表を行う。
http://www.city.himeji.lg.jp/s110/2212766/_32185.html

校長　西田耕太郎先生
児童数　305人
学級数　14学級（うち特別支援学級2）
所在地　〒671-0246　兵庫県姫路市四郷町坂元227
TEL　079-252-3636
URL　http://www.himeji-hyg.ed.jp/index.cfm/20,0,165,html

姫路市立四郷小学校校長
西田耕太郎
にしだ・こうたろう
「困難にくじけない強い心を持つ、心の体力を備えた子どもを育てていきたい」

姫路市立四郷小学校教頭
引地良典
ひきじ・よしのり
「楽しく学校生活を送り、何事にも一生懸命に取り組む子どもを育てたい」

姫路市立四郷小学校
上野裕哉
うえの・ひろや
小中一貫教育担当。「子どもの力を伸ばすことに、全力で取り組んでいきたい」

姫路市立四郷中学校校長
長谷川貴久
はせがわ・たかひさ
「子どもを中心に据え、子どものことを常に最優先する学校運営を続けていきたい」

姫路市立四郷中学校
嶋田 聡
しまだ・あきら
小中一貫教育担当。「子どもをしっかり見取り、成長を支えていきたい」

保護者からは、「ルールを守って生活にメリハリが付いた」「空いた時間を家庭での交流や勉強に使えた」などの声が上がっている。

義務教育9年間を通して子どもの生きる力を伸ばしたい

小中学校が連携した活動により、子どもの学習意欲は高まっている。「算数が苦手でも、計算の『SKY』では満点を取ることができ、『自分もやればできる』と自信を付ける子どももいます。他教科の学習意欲にもつながっています」（引地教頭）

目標を持って中学校に進もうとする6年生も増えている。「心の架け橋」のワークシートに書く、中学校への期待度のクラス平均値は、13年9月では60％に満たなかったが、翌年2月にはほぼ80％にまで伸びた。

「中学生と身近に接するうちに、中学校で自分のしたいことが固まってくるようです。『この部活動を頑張りたい』など、具体的な目標を話す子どもも増えました」（上野先生）

中学校入学後は生徒間の一体感が強まっていると、四郷中学校・小中一貫教育担当の嶋田聡（あきら）先生は話す。

「近年の新入生を見ていると、つまずいている友だちを励ますなど、全員で頑張ろうという姿勢を感じます。小学校時代に一人ひとりが学習に自信を持てるようになり、気持ち1つで自分が変われることを実感したからこその変化だと思います」

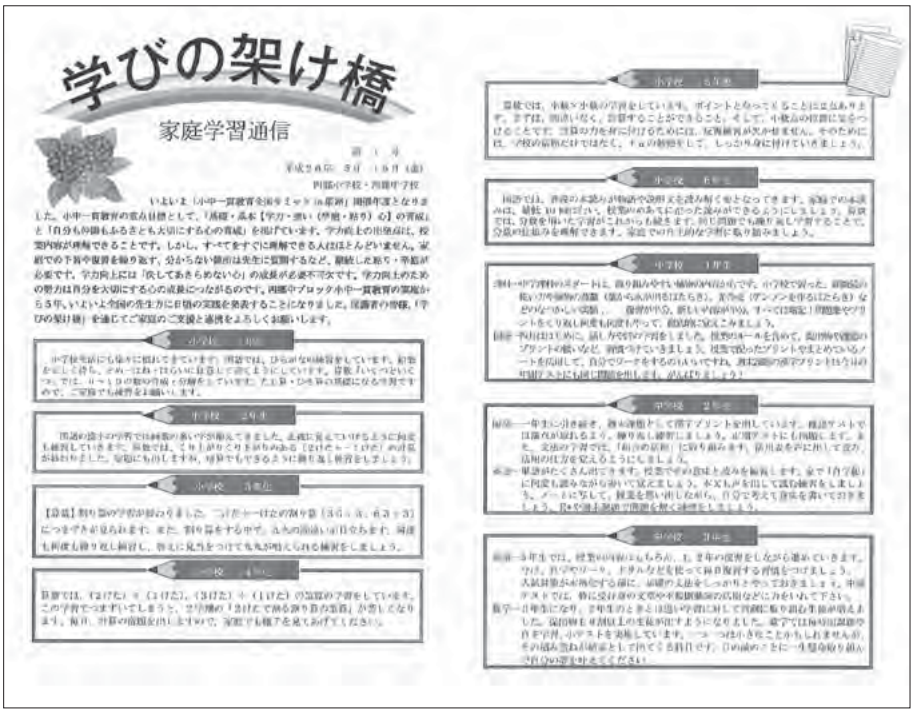
教師の意識も変化していると、四郷中学校の長谷川貴久校長は話す。

「両校の先生方が、子どもの具体的な姿をイメージして中学3年生までにどのような力を育むかを考え、指導を検討するようになったと感じます。どの先生からも新たな取り組みのアイデアがよく出されるようになったのも、そのためでしょう」

西田校長は、これからも小中連携に力を入れていきたいと話す。

「本校の小中一貫教育の取り組みは始まったばかりですが、先生方の視線はまとまってきています。今後も『四郷はひとつ』を合い言葉に四郷中学校と力を合わせ、義務教育9年間を通して子どもの生きる力を伸ばしていきたいと考えています」

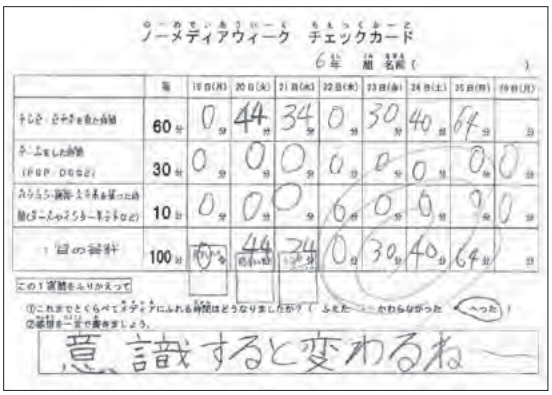
図2　「学びの架け橋」



毎月、学年団で話し合い、記載する家庭学習内容を1～2教科分決める。積み上げが特に重要な算数（数学）が含まれることが多い。今、授業で何を学び、どのような課題があるかをタイムリーに示し、だからこそ家庭でこういう学習に取り組んでほしいと呼び掛ける学年が目立つ。継続が重要なため、1学年の割り当てを少なくして、教師の負担も減らしている。年間の「学びの架け橋」をファイリングすると、実態に応じたきめ細やかな学習の手引きとなる

＊同校の資料をイラストを変更して掲載

図3　「No！　メディア・ウィーク」チェックカード（6年生）

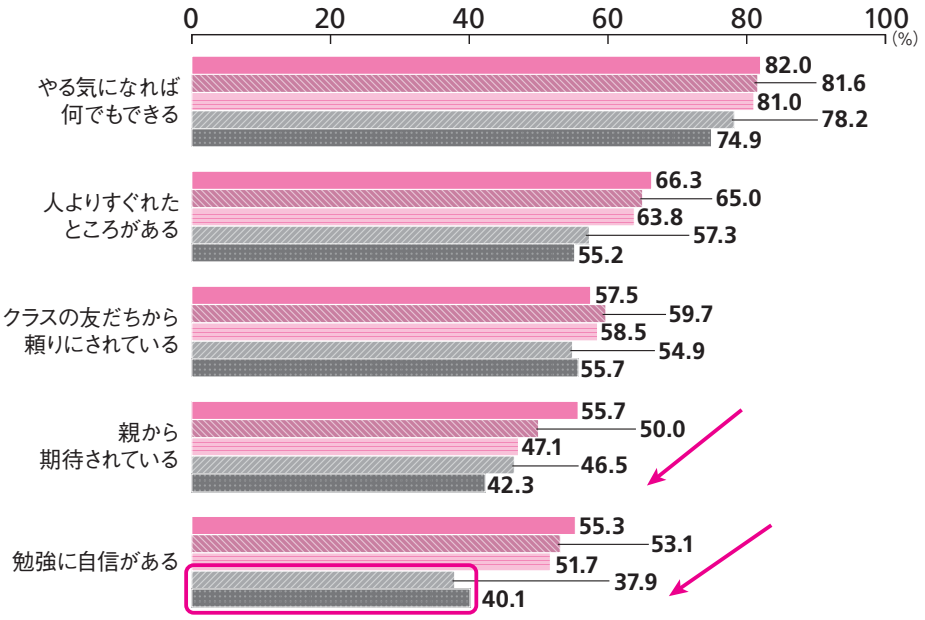


チェックカードは、子どもが「テレビ・ビデオを見た時間」「ゲームをした時間」「パソコン・携帯・スマホを使った時間」「1日の合計」「この1週間をふりかえって」を書き、担任に提出。担任は内容に目を通し、判を押してから子どもに返却する

＊同校の資料をイラストを削除して掲載

中学1年生で勉強への自信が急激に下がる

自己意識（回答：全国の小学4年生～中学2年生）

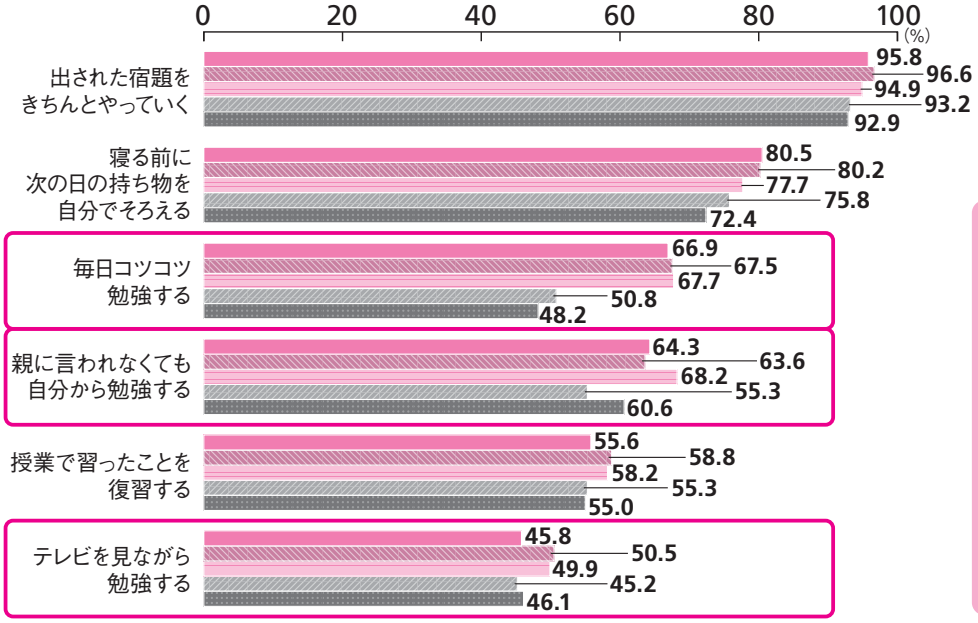


注1）数値は「とてもあてはまる」と「まああてはまる」の合計　注2）5項目を抜粋

学年が上がるにつれて、自己意識に関する項目の割合が下がり、「親から期待されている」「勉強に自信がある」は、小学4年生と中学2年生とで13ポイント以上の差が出ている。「勉強に自信がある」は中学校段階で下がり、特に中学1年生での落ち込みが激しい

「毎日コツコツ勉強する」は中学校段階で大きく下がる

家での学習習慣（回答：全国の小学4年生～中学2年生）



注1）数値は「よくある」と「ときどきある」の合計　注2）小学生と中学生の両方を調査した6項目を抜粋

全体として、学年が上がると学習習慣に関する項目の割合が減少する傾向にある。特に「毎日コツコツ勉強する」は中学校段階で大きく減少し、「親に言われなくても自分から勉強する」は中学1年生が最も低い。勉強への自信の低下との関連性も考えられる。また、「テレビを見ながら勉強する」はどの学年段階も5割程度である

出典：ベネッセ教育総合研究所「小中学生の学びに関する実態調査」（2014）
調査時期は、2014年2月～3月、調査対象は、全国の小学4年生～中学2年生の子どもとその保護者各5,409人（小学4年生1,217人、5年生1,184人、6年生1,049人、中学1年生933人、2年生1,026人）、調査方法は郵送法による自記式質問紙調査

上記の関連データはコチラ！
http://berd.benesse.jp/
＊「調査・教育データ」コーナーをご覧ください

データの掲載は2014年10月上旬を予定

読者のページ
Reader's VIEW

2014 Vol.1特集「学びに向かう土台を築く学級づくり」へのご意見

このコーナーでは、編集部に寄せられた読者の先生方からのご意見をご紹介します。

＊『VIEW21』小学版のバックナンバーは「ベネッセ教育総合研究所」ウェブサイト（http://berd.benesse.jp）でご覧いただけます。

◎30年前、初任時に先輩の先生から繰り返し言われたのは「まず学級づくり」です。その後も、いじめ、不登校、中1ギャップなど、課題が出るたびに、学級は子どもが安心して生活できる場であるのかを問い返しました。学びに向かう環境としての学級づくりは、教師の資質と関連性が高いのではと思います。「安心して学べる環境づくり」が、私の学校経営の中心です。［鹿児島県／O小学校］

◎「学びに向かう土台を築く学級づくり」は良い特集でした。若手教員が増え、指導方法に目が向きがちですが、まず学級づくりがあり、そこがしっかりしていると、次の学びの成長へとつながります。特に、総論の杉田洋（ひろし）視学官の話は、何回読んでもはっとさせられます。管理職は孤独に強くなる必要があるが、孤立してはいけない。その通りだと思いました。［山口県／J小学校］

◎総論での「壁を与えることに臆病にならず、張り合いのある集団活動を」という杉田視学官の言葉は、学級、学校を問わず、今、必要とされることだと思います。何事にも皆が臆病になってきており、そのことが教育を停滞させている原因だと思いました。［熊本県／M小学校］

◎東京都品川区立小中一貫校荏原（えばら）平塚学園の実践では、複数の教員で児童の指導に当たる方法が具体的に明示されていました。この仕組みを参考にして本校に合ったものをつくっていきたいと思います。また、家庭の教育力に差があることに着目し、マニフェストを作成して保護者会で示していることも、学校の信頼を高める意味でとても有益だと思いました。［東京都／T小学校］

◎山梨県山梨市立日川（ひかわ）小学校の「プロジェクト活動の積み重ねで子どもと共に学級をつくる」の取り組みで、教師主導のあり方を見直し、子どもと一緒に学級をつくるということに共感しました。学級力アンケートのレーダーチャートは目に見える評価であり、成果がよく表れていると感じました。［岡山県／M小学校］

◎「私を育てたあの時代、あの出会い」の中に「自分が変わることで、周りの先生方との関係も良い方向に進む」という言葉がありましたが、今、まさに実感しています。校長として新しい学校に赴任し、関心を持って自分を迎えてくれた教職員一人ひとりを大切にするために、声掛けを惜しむことなく過ごしています。［岐阜県／M小学校］

◎「Benesse発　これからの教育」で紹介された「ビブリオバトル」は、聞いたことはありましたが、記事を読むまではよく分かってはいませんでした。各学年の国語の教科書に「本を紹介しよう」という単元があります。本を紹介するという目的意識を強く持たせることが難しいと考えていたので、発達段階に応じてアレンジしていくことが可能な活動だと思いました。［北海道／U小学校］

◎「つながる学校と家庭の学び」の「じぶんコントロールカード」のように、自分で目標を立て、それを振り返りながら毎日過ごすことは、キャリア教育の観点でも有効で、学校と保護者が共有できるのも良いです。ただ、記述が苦手な子どもも多く、保護者の価値観・生活観が多様化し、教師も多忙です。出来るだけ簡単に記録できる形式にし、継続したいと思います。［東京都／K小学校］

子どもは未来

ベネッセ教育総合研究所は、
子どもたちの成長に寄り添う研究と
社会への発信を通して、
一人ひとりが学びに向かい、
今と未来を“よく生きる”ことに貢献します。

ベネッセ教育総合研究所

次世代育成研究室　初等中等教育研究室
高等教育研究室　グローバル教育研究室
情報編集室

編集後記

「自ら学び考え、行動する力」を子どもに付けるため、先生方は出番を見極めることや、子どもの課題を指導の課題として捉える姿勢を大切にしているという言葉が印象的でした。そして、実践にあたっては、熱心な先生が1人で抱え込まないための“同僚性”も大切だと教えていただきました。今号で紹介したワークショップの手法が、先生方が学び合う風土づくりの一助になればうれしく思います。　『VIEW21』小学版　編集長　杉田美穂

VIEW21 小学版 2014 Vol.2　2014年10月2日発行／通巻第41号

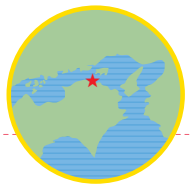
発行人　谷山和成
編集人　小泉和義
発行所　（株）ベネッセホールディングス
ベネッセ教育総合研究所
印刷製本　凸版印刷（株）
編集協力　（有）ペンダコ、丹羽三千代
執筆協力　二宮良太
撮影協力　荒川潤、川上一生
イラスト協力　幸剛、浅沼リカ

◎お問い合わせ先
情報編集室
〒206-0033
東京都多摩市落合1-34
電話　042-311-3390

©Benesse Holdings,Inc. 2014

色とりどりの学びの情景

地域のフロントランナーに！



表紙の学校　香川県高松市立屋島小学校

未来を築く力には学力も重要だ。家庭学習プリントの目標達成者を校長室での「わくわく給食」に招待。これを楽しみに頑張る子どもも多いという

「古代山城サミット高松大会」では、「甦（よみがえ）れ屋嶋城」と題し、屋嶋城の歴史と発見～修復の過程を再現。全国から訪れた人々に屋島の過去と現在、未来への思いを伝えた。来年度、同校は「全国小学校生活科・総合的な学習教育研究協議会香川大会」の会場校となる

毎月1回の「ぴかぴかデー」では、保護者や地域の人が来校し、子どもと一緒に掃除をする。他に、通学路の見守り隊や読み聞かせなど、普段から地域の人との触れ合いがある

源平合戦の舞台であり、古代山城の遺構が数多く発見され、四国霊場第八十四番札所を有する香川県屋島。歴史・文化・自然が豊かな地域をもっと知り、地域の未来を築く力を育もうと、高松市立屋島小学校は１年生から地域学習に力を入れる。町探検、祭りへの参加など、地域の協力を得ながら、子どもは自分で歩き、目で見て、屋島の良さを発見してきた。

昨年は、６年生が高松市主催の「古代山城サミット高松大会」に参加。124人全員で歴史を調べ、台本から作り上げた劇を発表した。劇は大成功だったが、次年度の６年生宛てに書いた手紙には、「来年はもっと地域の人が入る劇にしてほしい」と後輩に期待するメッセージもあった。それを受け、今年度の６年生は昨年の劇を磨き上げ、屋島山上で上演し、観光客を呼び込む考えだ。思いも課題も受け継ぎ、子どもたちは自ら新たな形をつくっていく。

2014年10月2日発行／通巻第41号
発行人 谷山和成　編集人 小泉和義　発行所 （株）ベネッセホールディングス ベネッセ教育総合研究所
©Benesse Holdings,Inc. 2014

過去1年間の特集テーマ
Back Number

2014
Vol.1 学びに向かう土台を築く学級づくり

2013
Vol.4 主体的に学ぶ力を育む―学び方の工夫で学習意欲を高める
Vol.3 家庭学習で学ぶ意欲を伸ばす
Vol.2 自ら表現したくなる授業づくり

全ての記事を、ウェブサイトからPDFでダウンロードいただけます

http://berd.benesse.jp　または　ベネッセ　研究　で　検索

次号 Vol.3 は 2015 年 2 月発行（予定）です